

13 頭塔の調査 第232次

奈良県教育委員会が行う頭塔の復原整備に伴う調査である。奈良県はすでに1986年度からこの事業に取り組んでおり、県の委託を受け奈文研は同年度に頭塔北東四半部の調査（平城宮跡第181次調査）、1988年度に北西四半部の調査（同第199次調査）を行い、頭塔の構造・規模・変遷等を明かにしてきた。これらの調査成果をふまえ、県は頭塔の復原整備基本計画を策定した。その骨子は、北半部は基壇および塔の本体である7段の石積みを本来の形に復原し、その外周にテラス状の見学路を廻す。南半部は現状のままとし、樹林を残す、というものである。この基本計画に基づき、今年度（1991年度）から基壇の復原を試験的に行うこととなった。これに伴い石積みの解体が必要となる。石積みの解体そのものが発掘調査であること、さらに石積みの復原にあたっては本来の石の積み方、その内部の土の築き方などを解明し、復原の資料とする必要があった。そのために東面中央の東西中軸線沿いに幅約80cm、長さ18mの断ち割りトレンチを設定した。石積みの解体範囲、断ち割りトレンチ、および今年度行った基壇石積み復原の試験施工範囲は図51のとおりである。

石積みの解体調査 基壇および7段の石積みと各テラスの石敷について、①すでに本来の位置から動いていると思われるもの、②上部に石を積み上げるに際しこのままでは不安定と判断できるもの、③樹根の除去に伴ってはさざるをえないもの、は解体することとした。最上部の第七段から始め、順次下段へと石をはずしていった。はずす石はすべて1個1個番号を付し、かつ高さを入れた平面図を作成し、さらに写真およびビデオ撮影をしながら解体した。各段の石積みについて上からおのおの一層ずつこれを行ったので、各段とも2～3回の実測を行った。

すでに前2回の調査でもある程度判っていたが、頭塔の石積みには近世城郭の石垣に見られるような積み石背後の裏込め栗石がない。石の下、裏側、石と石の間の目地、すべて土である。また、基本的には石を据えるための根石や飼い石を用いていない。石をはずした中から少量の瓦・土器が出土したが、これについて

は次の断ち割りトレンチの報告の中で一括して行う。

断ち割りトレンチ 最上段の心柱痕跡の東から基壇前面の石敷面に至る東西トレンチを設け、土および石積みの構築法、改修の痕跡などを調べた。以下に今回の知見を列記する（図51）。

- 1) 積み土は版築によっている。版築一層の厚さは1cm以下に区分できる薄い層から、30cmを越える層までであるが、平均的には10cm前後である。第五段から下が薄い層で堅固に積み上げられているのに対して、第六段から上は比較的粗い。
- 2) 版築は非常に堅く搗き固められており、搗き固め仕上げ面と思われる土が明瞭に剥離する面を数多く確認することができた。
- 3) 版築に用いられている土は、その色調、礫の混入度などから大きく四種に区分できる。積み土の主体をなすのはこの地域の地山土に近似する礫混じり赤褐色砂質土である。これに三種の粘質土が互層をなす。粘質土はその色調から、暗灰色・黄褐色・暗黄褐色に分かれる。第五段から第四段付近の暗灰色粘質土は黒色に近く、特に際だっていた。今回これら各種の土の物理的組成および化学的成分分析を行うべく土壌サンプリングを行ったが、その結果については復原する土の締め固め試験のために作成した10種のテストピースの資料も含めて最終的な本報告で行う予定である。
- 4) 版築は土のみではなく、途中に瓦や石を敷き込んでいる。第一段から三段の間が顕著であった。強固な地盤を築くための技術であろう。
- 5) 地山上面には旧表土と考えられる厚さ10cmほどの黒茶色の軟らかい土が載っており、版築はこの上から行われている。つまり、ここでは掘り込み地業をしていない。
- 6) 石積みと版築は基壇を除いて同時に行われている。下から順に石を積みながら、その裏を版築する。
- 7) 基壇の石積みには版築を掘り込む形の、石の据え付け掘方がある。掘方の埋土から14世紀以降の羽釜の破片が出土した。この掘方は基壇前面の石敷も一体である。東面と西面では基壇石積みの手法が異なるので、基壇全体には及ばないか

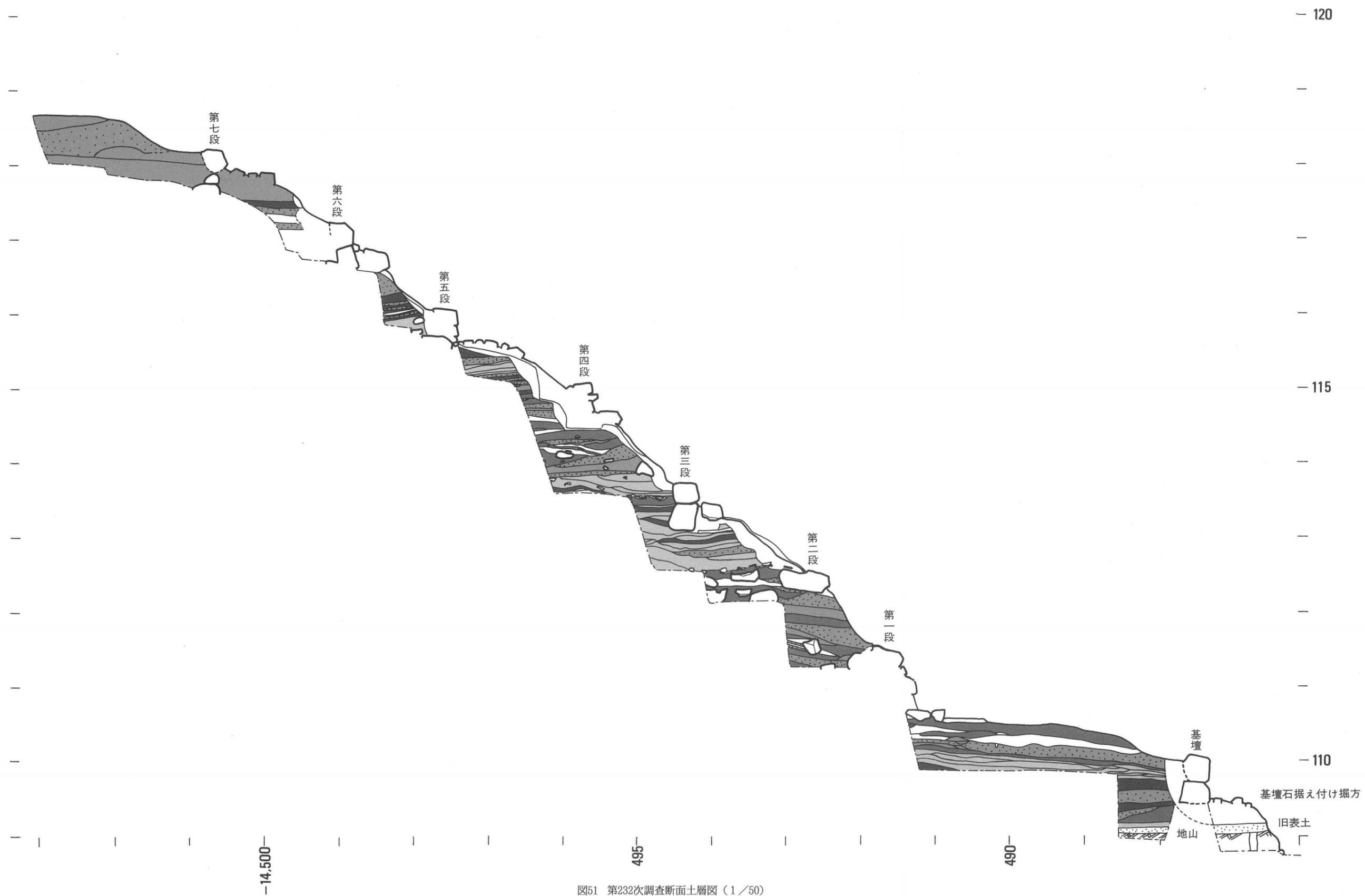


図51 第232次調査断面土層図 (1/50)

も知れないが、少なくとも東面基壇石積みは14世紀以降に改修されている。

8) 狭い範囲でもあり遺物は比較的少ないが、意図的に敷き込まれた瓦以外にも積土の中から瓦と土器が若干出土した。瓦のうち軒瓦は丸・平各1点であり、いずれも東大寺式であった。土器では版築土中に数点の古墳時代の甕や杯があった他、前述の基壇掘形内からは羽釜と灯明皿（13世紀前後）が出土している。

(高瀬要一)

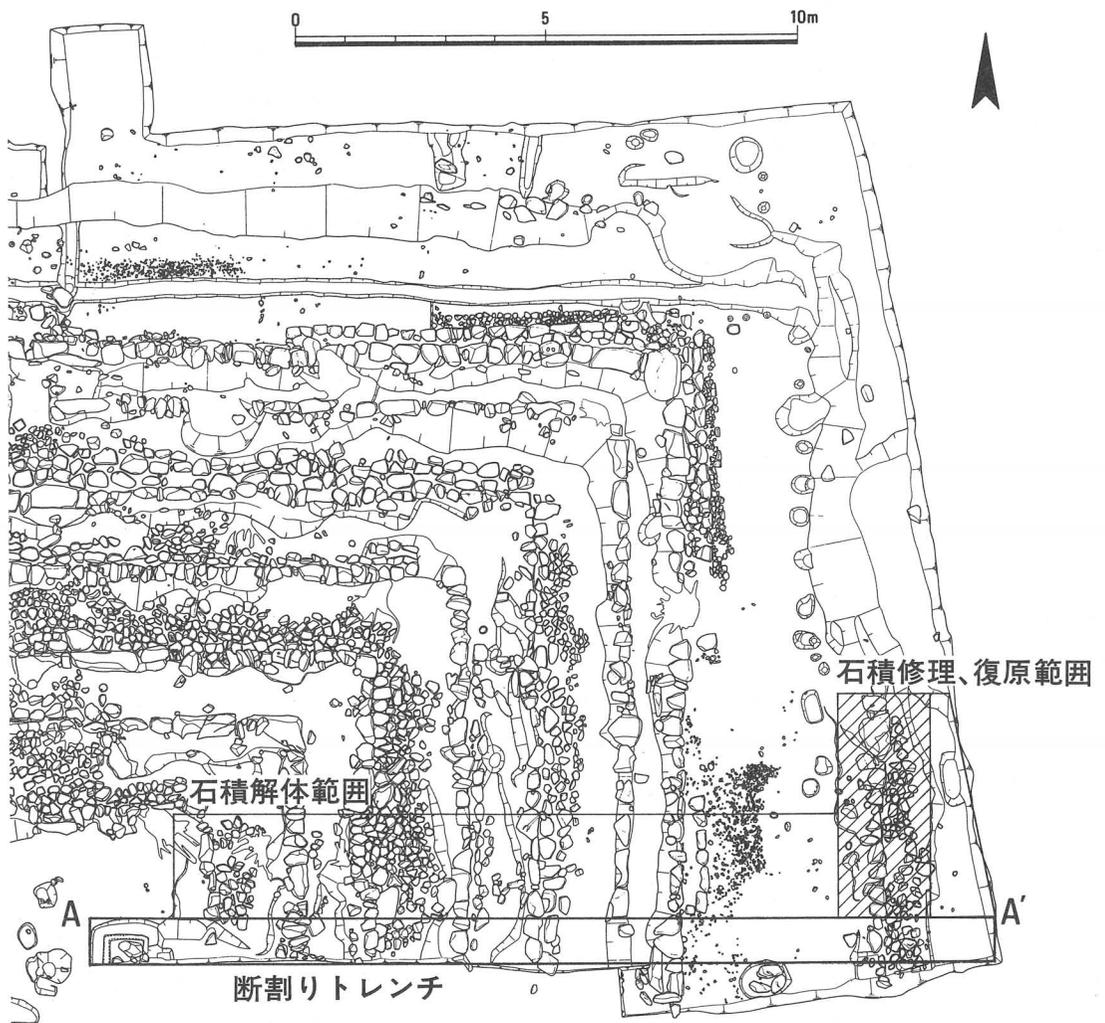


図52 頭塔遺構図(北東部)・調査区位置図(1/150)

14 西隆寺旧境内の調査（1）

第228次

1 はじめに

本調査は、奈良市都市計画道路予定地の事前調査の第Ⅲ区である。調査は南北二区に分けて行い、まず南区を1991年8月5日に開始し、同年10月3日に終了した。次いで北区を10月8日に開始し、11月7日に終了した。調査面積はあわせて700㎡である。本調査区の東に第219次調査区が、南に第223-21次調査区が隣接する。

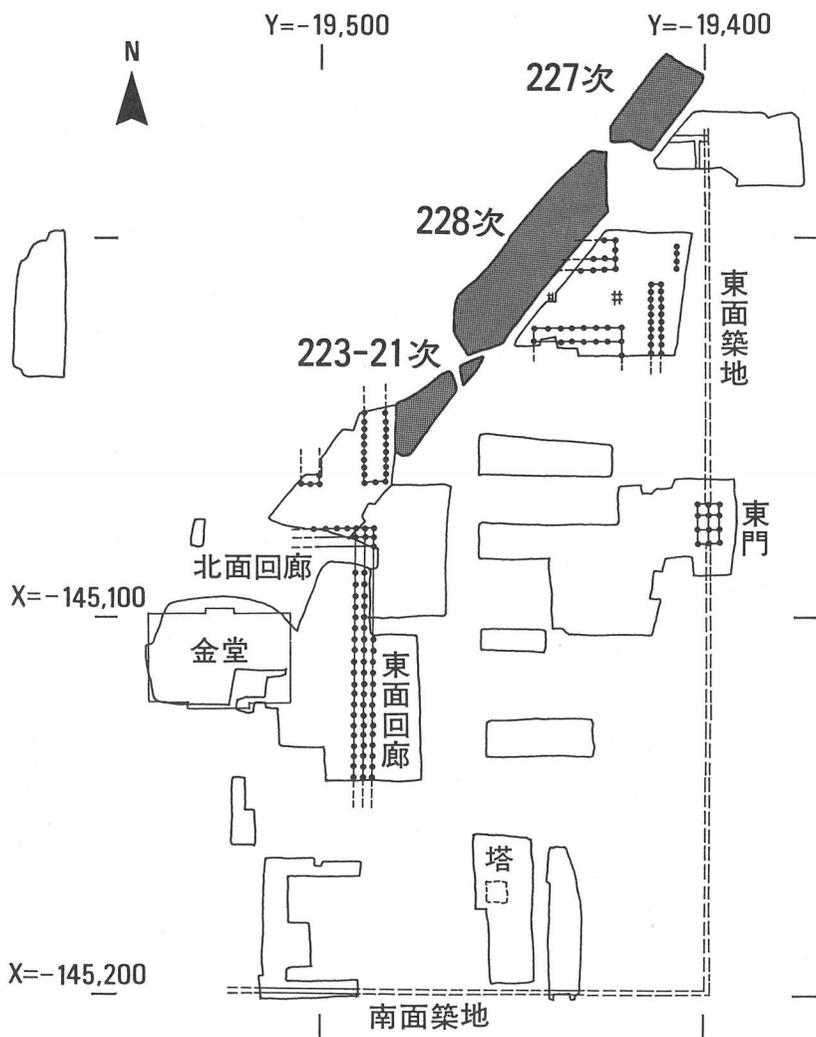


図53 西隆寺旧境内調査位置図（1/2,000）

2 遺 構

南区 奈良時代の掘立柱建物4棟、礎石建物1棟、掘立柱塀2条、井戸1基、小穴、溝と古墳時代の掘立柱建物、掘立柱塀、池状遺構などがある。

掘立柱建物SB522は南北棟で、梁間2間桁行2間以上。北西の部分のみを検出した。礎石建物SB521は東西棟の北西部分を検出した。梁間2間柱間7尺、桁行3間以上柱間5.5尺。礎石は残存していないが根石を多数留める。掘立柱建物SB520は南北棟で、梁間2間柱間8尺、桁行5間柱間7尺弱である。SB510は掘立柱建物南北棟。梁間2間柱間10尺、桁行総長17.1mで7間、柱間は8尺、東に廂を持つ。廂の出は11尺。柱掘形は方形で1辺が1m近い。西側柱から西へ12尺のところに、柱筋をそろえて凝灰岩2ヶ所と、その抜き取り穴と思われるもの1ヶ所を検出しており、縁東の可能性もある。西側柱列の柱掘形は、西隆寺創建時と考えられる茶褐色砂質の整地土を除去した段階で検出されたため、この建物は西隆寺造営以前のものと考えられる。SB511は南北棟掘立柱建物。梁間1間柱間2.0m、桁行2間総長2.9m。小型で柱掘形も小さい。SB511より古く、古墳時代のものと考えられる。SB517は掘立柱建物の東南隅と推定。比較的大きな柱掘形2つを確認した柱間は9尺とみられる。

溝SD529は幅3m、深さ0.8mで蛇行している。人工的に掘削されたものではなく、秋篠川の支流ないし分流のひとつであろう。灰褐砂質土が堆積。古墳時代の、須恵器、土師器のほか、石製紡錘車、メノウ製勾玉などが出土した。同じく東西溝SD523は、幅0.3m、深さ0.35mで、池状遺構SG530に流れ込む。同じく古墳時代のSB510の西側柱掘形により切られている。東端で南に分岐して溝SD524となる。古墳時代か。溝SD513は浅く幅が1.2mの東西溝。西端で南に折れ、浅い窪み状の溝SD514、SD516に連なる。

掘立柱南北塀SA525は3間分を検出、柱間は2.7m（9尺）等間である。SA512は3間分を検出したが、柱間は4～5尺で一定せず、柱穴も小規模である。

井戸SE492は、第219次調査で掘形の南東隅を検出していたもの（1990年概報SX15）で、今回ほぼ全体を調査した。掘形は一辺約3mの正方形。掘形内の埋土は硬

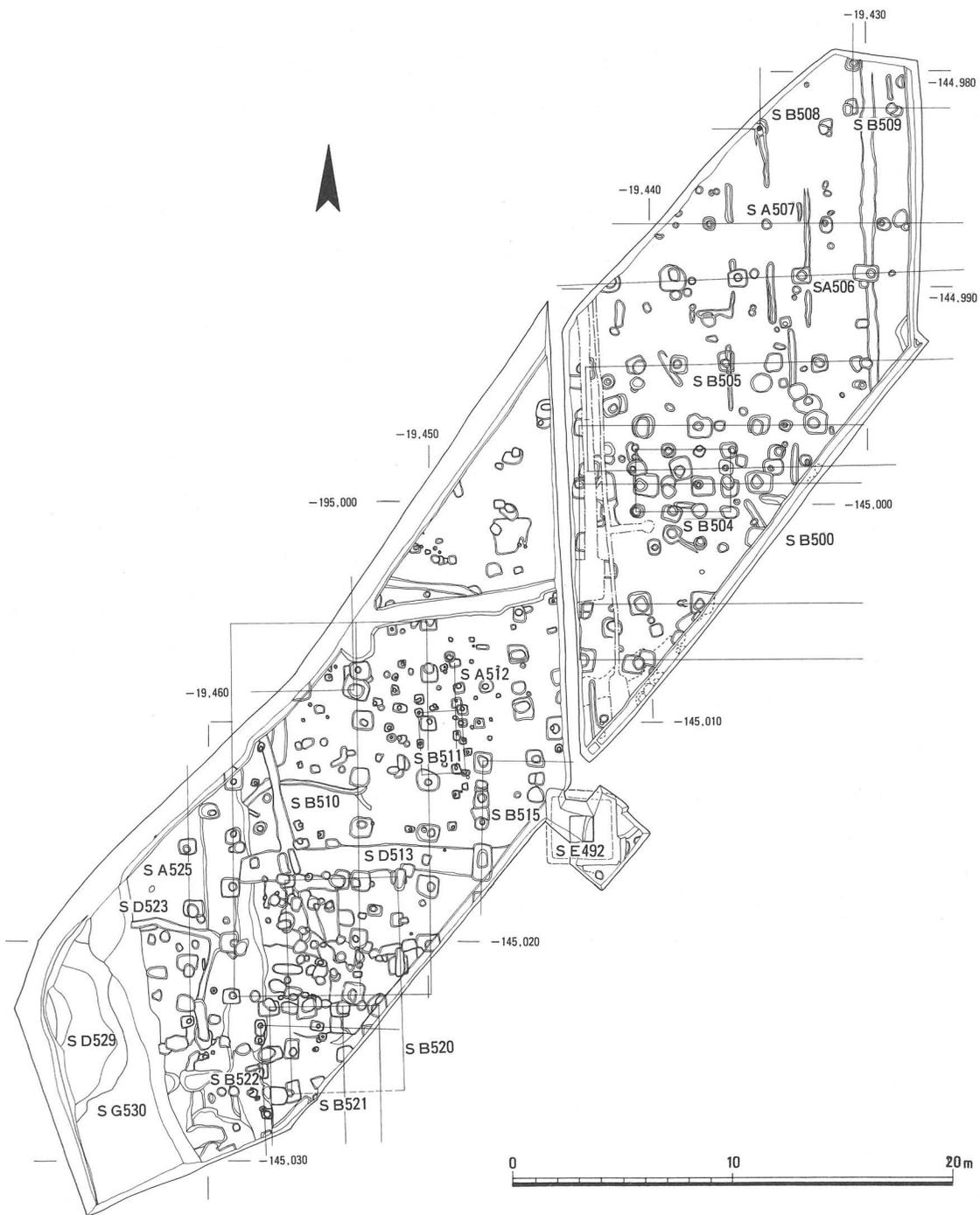


図54 第228次調査遺構図 (1/300)

質の粘土ブロックで、頑丈に作られている。井戸枠は横板組で一辺1.2mの方形に組むが、保存状態はよくなく、詳しい構造は不明。現地表面から3.3mのところまで掘り進んだが、底には至らず、崩壊の危険があったためそれ以上の発掘は中止した。深さ2.3mの抜き取り穴があり、平瓦・丸瓦が多く投げ込まれていた。埋土出土の土器より西隆寺造営時には埋まっていたと考えられる。

調査区南西部で東岸を検出した池状遺構SG530は、底が平らであることと、岸が直線状に伸びることから人工的に掘削されたものと考えている。底に近い部分から西隆寺創建時の軒平瓦が出土しており、この遺構が完全に埋まったのは奈良時代後半と考えられる。他に埋土からは古墳時代の遺物が多く出土した。

北区 東西棟建物SB500は、219次調査で東半を検出した建物SB12（1990年度概報、以下カッコ内同）の西半部である。本調査によってその平面は七間二面、柱間2.7m（9尺）等間の大規模なものと判明した。SB500の北庇に重複する小規模な建物SB504は、桁行3間、総長4.2m、梁行1間、柱間2.6mで、SB500・505との柱穴の重複はない。SB505は桁行6間以上（推定7間）、梁行2間で、柱間は2.1m（7尺）等間である。柱穴の重複によりSB500より古いことを知る。東西塀SA506は、柱間3.0m（10尺）等間で、SB505の北3.9m（13尺）に位置し、柱筋の方向を等しくするので、SB505と同時期と推定される。SB508は径25cmの柱根を留める柱堀形で建物の東南隅部分と推定、またSB509は、三つの柱堀形を建物の西南隅部分と推定した。柱間は1.8m（6尺）である。

3 遺物

瓦類は軒丸瓦10点、軒平瓦21点、塼5点、熨斗瓦1点などが出土した。また溝SD529と池状の遺構SG530の埋土から古墳時代の大量の土器が出土しているが、現在なお整理中であり、詳細は正報告書にゆずる。

4 まとめ

本年度までの一連の調査によって、西隆寺中心伽藍の回廊東北部から、寺地北東隅までを帯状に明らかにしたことになる。なお検討を要する点も数多いが、特に219次・228次両調査によって、ひとまとまりの遺構群を確認し得たので、主に

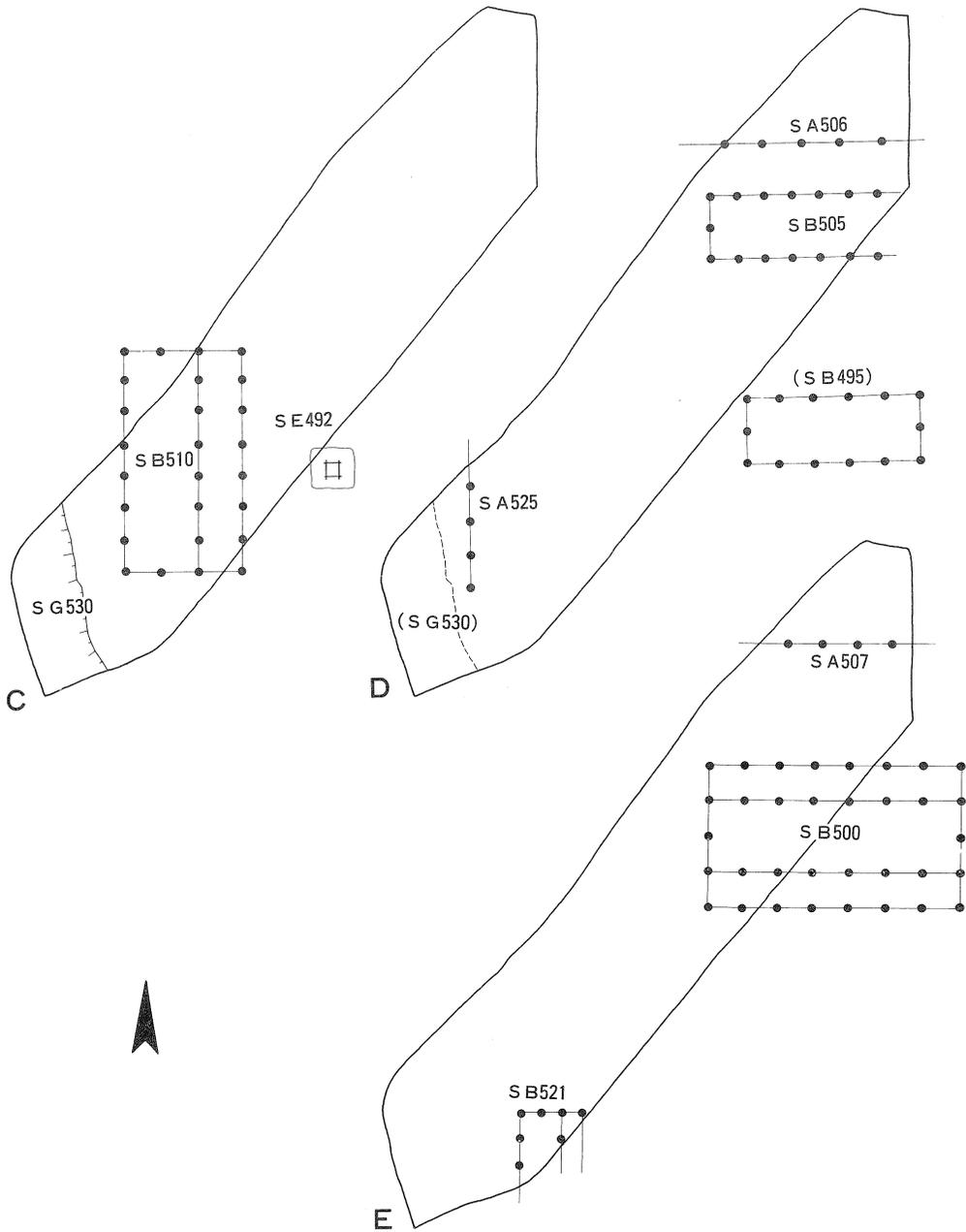


图55 遺構変遷図

その調査の成果を中心に、遺構の配置と時期区分について若干触れ、まとめとする。

古墳時代（A期） 一連の調査区のほぼ全域に亘って、古墳時代の遺物包含層が広がっている。また同時代に属する溝や池状遺構、建物なども検出されており、さらに無数の小ピット群の存在からも、このあたり一帯に古墳時代の集落が営まれていたことは明らかである。219次調査区では斜行大溝SD443（1991年度概報SD09）、228次調査区では池状遺構SG530、建物SB511などが顕著なものである。

奈良時代前～中期（B・C期） 西隆寺造営前の平城京右京二条二坊の敷地にあたる。この時期に属すると推定される大規模な建物SB510及び井戸SE492が検出され（C期）、さらにこれらに先行する建物SB515・517の存在も明らかになった（B期）。しかし奈良時代前半に、この地が宅地としてどの程度利用されていたかは未確定の要素が多く、特にこの時期の設定には修正の余地を残す。

奈良時代後期以降（D・E期） 西隆寺造営と共に、その一院と推定される建物群が造営され（D期）、さらに整備される（E期）。D期にはSB485（1990年度概報SB06）・SB490A（SB07A）・SB495（SB10）・SB505・SA501・SA506・SB525が属する。これらは、219次調査段階では奈良時代前半にあてていたものを含み、改訂した。

E期にはSC480（SC05）・SB490B（SB07B）・SB500・SB521・SE491（SE08）が属する。この時期は桁行7間の大規模な建物が2棟中軸をそろえて南北に並び、しかも一棟は掘立柱を改めて礎石建としたもの（SB490）で、仏堂の可能性が高く、子院的な性格を考慮する要があろう。この一画は、すでに前年度概報で述べた通り、井戸SE491の廃絶時期である10世紀ころまで存続したと推定される。以上、暫定的な遺構の時期区分を行なったが、今後は出土遺物との対応関係を検討して遺構の編年を確定し、京内寺院の敷地周辺部の様相を示す実例としての西隆寺東北部の性格を考察してゆきたい。（森本 晋・松本修自）

15 西隆寺旧境内の調査（2）

第227次

奈良市都市計画道路に伴う事前調査の第Ⅳ区。調査地は西大寺東町に所在し、西隆寺の東北隅を検出した第210次調査区に西接する。調査期間は1991年7月1日～7月31日で、面積は約500㎡である。調査地の周辺は、秋篠川の氾濫でかなり削平を受けており、本調査区でもそれが予想された。調査の結果、北半部については秋篠川の氾濫と後世の削平により奈良時代の遺構は失われていたが、南半部は比較的保存が良く、西隆寺関係の遺構を検出することができた。

調査区の基本層位は、北半部と南半部で様相が異なる。北半部では、上から置土、黒褐色粘質土で、その下が北1/3では灰褐色砂礫（秋篠川旧流路）、中央部では青灰色粘質土（地山）となる。南半部では、置土、床土の下に茶褐色の薄い遺物包含層があり、その下が地山となる。地山は、東半部は黄褐色粘質土であるが、西半部は灰褐色の砂層と異なっている。

検出した遺構は、奈良時代の掘立柱建物1棟、掘立柱塀1条、東西溝1条、橋1基、礎石据付け穴1基、秋篠川旧流路、および多数の柱穴、溝、土坑などである。このうち、柱穴には古墳時代の掘立柱建物の一部とみられるものがあるが、調査区内ではまともならなかったため、ここでは奈良時代の遺構を中心に述べる。

SA600 西隆寺の北面築地。築地本体や添え柱などは検出できなかったが、第210次調査で東面を限る施設が築地塀であることが判明しており、南雨落溝SD429の状況と、築地に代わる閉塞施設を検出できなかったことから、北面も築地塀であったと推定した。なお、調査区の西隅で礎石据付け穴SX608を検出し、ここに門が開くとも考えられるが、詳しい状況は明らかにできなかった。

SD429 北面築地の南雨落溝。長さ17mにわたって検出した。埋土は上下2層に分かれるが、下層の堆積は薄く、部分的に残存するだけである。調査区東端に近い部分では溝の断面はV字形で、溝幅も狭いが、西半では断面がU字形で、溝幅も広い。埋土からは、軒丸瓦6225A、軒平瓦6663Cb、6721Hb各1点と多量の丸・平瓦、奈良時代後半の土器が出土した。この溝には橋SX605がかかる。

S A 610は掘立柱東西塀。東半は後世の攪乱で削平されているが、5間分を検出した。先述の礎石据付け穴S X 608より古く、位置的にみても西隆寺造営以前の宅地の北限の塀であろう。S B 425は本調査区では柱穴を1個検出しただけだが、第210次調査で確認したものと合わせて、2間×2間の東西棟建物となる。

秋篠川旧流路は、調査区北端を蛇行しながら東西に流れる。南肩を検出しただけで、東壁際で部分的に深掘りしたが、1m以上掘っても底に達せず、湧水も激しいので底の確認は断念した。奈良時代の丸・平瓦が大量に投棄された状況で出土し、かなり早い段階でここが流路であったことがうかがわれる。（玉田芳英）

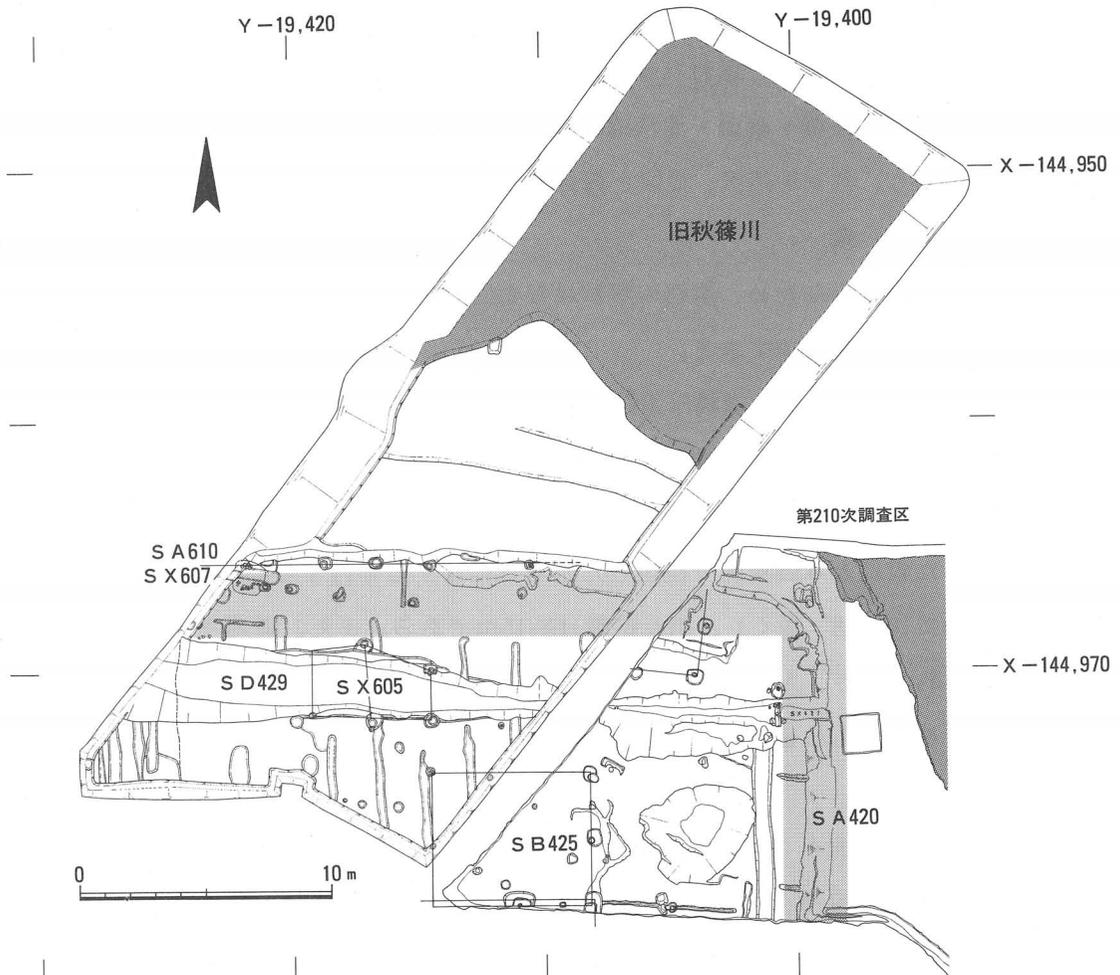


図56 第227次調査遺構図(1/300)

16 西隆寺旧境内の調査（3）

第223-21次

1 はじめに

都市計画道路建設にともなう事前調査で、3年度にわたって続けられた西隆寺旧境内地区の発掘調査としては、最後のものである。調査は平成4年1月6日に始まり、同年2月6日に終了した。調査面積は236㎡である。

調査区は、昨年度西隆寺北面回廊を検出した第221次調査区の東、今年度先行しておこなわれた第228次南区調査の南に位置する。『西大寺伽藍絵図』に描かれた西隆尼寺の伽藍図では北面回廊の北東部にあたり、鼓楼から東西塀にかけての一带に相当するものと思われる。この調査区からは、古墳時代と奈良時代の掘立柱建物・掘立柱塀・暗渠・池状遺構などを検出した。なお、発掘区は東西に2分されており、各々を西区、東区と仮称して、以下の記述を進める。

2 遺 構

発掘面積が狭小なため、遺構の解釈はなお完全とはいえないが、少なくとも以下のような遺構を確認できる。

A期（古墳時代） 池状遺構SG02と掘立柱建物SB01によって構成される。SG02は第228次南区で検出したSG530に連続し、西区東端から東区の全体にわたって深さ80～100cmの埋土層（暗青灰粘質土・黒灰粘質土）がみられる。第228次南区で検出した東肩と本調査区で検出した西肩はほぼ平行する関係にあり（北に対して西に16～18°傾く）、相互距離は約15mである。また、両肩ともに急勾配に成形されており、人為的な貯水遺構である可能性が大きい。ただ、規模の大きさや深さを考えあわせると、古墳の周濠のような溝状施設であった可能性も残されている。

SB01は棟筋が北から東に37°傾いた掘立柱建物で、桁行4間（7.2m）×梁間2間（3.4m）の規模をもつ。柱間は梁行方向で1.7m等間だが、桁行方向では中央2間が2.2mで、両隅間は1.4mと短くなっている。この建物の存在により、池状遺構SG02の周辺に集落が形成されていたことを推定できよう。

B期（奈良時代前半） 本調査区の西北隅で発見されたSB03は、第221次調査区の北端で検出されたSB7（奈良時代前期）の東妻部分である。この建物は、桁行4間以上×梁間2間以上の東西棟で、柱間寸法は桁行方向が2.4m（8尺）等間、梁行方向は2.0m（7尺）である。池状遺構SG02は、その埋土から古墳時代の土器だけでなく、瓦や奈良時代の土器が出土しており、奈良時代になっても、



図57 第223-21次調査遺構図（1/200）

かなり長いあいだ存続していた。

C期（奈良時代後半） SG02は、おそらく西隆寺造営前後の時期に埋められ、その上層が整地された。この整地層（暗赤褐砂質土）も、古墳時代～奈良時代後半の土器および瓦を多量にふくみ、その上面では門SB04・東西塀SB05・蛇行溝SD06・暗渠SX07などの遺構を検出した。

南北方向一対の掘立柱で構成された門SB02は、西区の西寄り中央に位置し、両方の掘形には柱根をともなう。柱根は直径25～28cmで、底に石と瓦を敷いて礎盤とする。とくに南側の柱掘形の底部では、西隆寺創建軒丸瓦6235-Cを上向きにして柱根下端とのあいだに詰め込んでおり、この門が主要伽藍の整備後に建立されたことを示している。門にともなう区画遺構は検出されなかったが、築地塀のような施設が想定されよう。

東西塀SA05は西トレンチの北寄りに位置し、SB04北側の推定築地塀にとりつくかたちで、東へのびる。柱間は2.4m（8尺）等間である。西から3番目の柱掘形に柱根が残り、その脇には木製の暗渠SX07が埋め込まれて

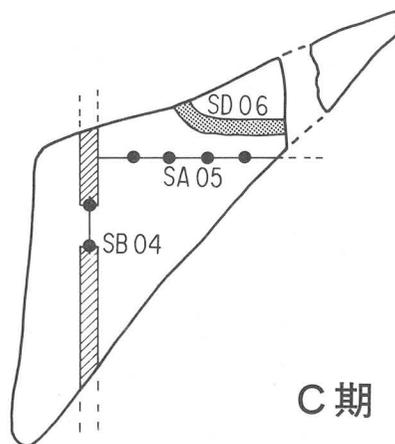
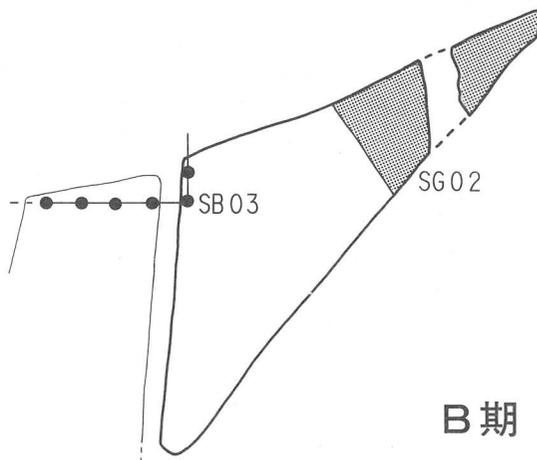
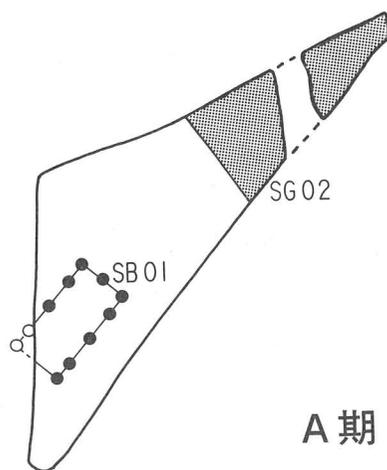


図58 遺構変遷図（1/500）

いた。SX07は長さ 210cm、幅30cmで、北側の蛇行溝SD06と南側の土壇状遺構SX08をつなぐ役割を果たしていたものと思われる。断割り調査によれば、池の上層を整地する段階で、まず暗渠、つぎに柱が据え付けられたと考えられるが、その時間差はわずかであり、両者は共存していた。また、この柱掘形からは6663-Cb型式、その東隣の柱掘形からは6710-A型式（いずれもⅢ期）の軒平瓦が出土しており、塀および暗渠の築造年代は平城宮軒瓦編年のⅣ期以降となり、西隆寺の創建年代と重なりあう。SD06は素掘りの蛇行溝で、西区の東壁から北壁にむかって斜行する（遺構平面図は最下層のみ残った状態を示す）。東壁で幅108cm、深さ15cm、北壁で幅192cm、深さ55cmであり、その埋土には大量の土器・瓦を含んでいた。

なお、SG02の埋土内からは、橋脚に用いたと思われる平行2列の杭列SX09も検出された。杭のなかには地山まで達していないものもあり、あまり古い時期の遺構とは思われない。おそらく、奈良時代につくられた仮設の橋だろう。

3 遺物

瓦 表に示したように、かなり多くの瓦が出土した。そのうち軒丸瓦31点、軒平瓦29点、道具瓦2点を含み、軒瓦のなかで最も多いのは、軒丸瓦が15点の6235C型式、軒平瓦が11点の6761A型式で、いずれも西隆寺創建瓦である。

土器 池状遺構SG02の埋土から古墳時代6世紀の土器、奈良時代中頃の土馬、奈良時代後半の長脚高坏などが出土し、その上層の暗赤褐砂質土の層からは、やはり6世紀の土師器と奈良時代の二彩または三彩の土器片などが出土した。さらにその上層にあたる瓦混灰茶砂質土の層からは、大量の瓦とともに9世紀中頃の緑釉陶器も出土した。以上の遺物からみて、暗赤褐砂質土層は西隆寺造営にともなう整地層、瓦混灰茶砂質土は西隆寺廃絶にともなう整地層と考えられる。

木器 池状遺構SG02の底から、杉の板材が10枚ほど出土した。緩く湾曲した断面をもつものがあり、槽を遺棄したものと思われる。

礎石 西トレンチ南西隅の土壇状の穴SX10から、礎石と思われる大きな花崗岩（直径約120cm・高さ約45cm）が出土した。一部に鑿の加工痕があり、回廊も

しくは講堂で用いられた礎石の可能性がある。

4 まとめ

以上の成果のうち、とくに重要と思われる点を要約しておく。

- 1) 古墳時代の当該地には、池状遺構SG02の周辺に掘立柱建物の集落が形成されていた。その年代は、出土土器からみて6世紀の可能性が大きい。
- 2) 奈良時代に入っても、右京一条二坊九坪の宅地のなかで池状遺構SG02は存続し、その周辺に掘立柱建物が建っていた。
- 3) 奈良時代後半の西隆寺造営前後に池状遺構SG02は埋められ、その上面が整地されて、溝・門・塀などの施設が築造された。門SB04では南側の柱の礎盤として西隆寺創建軒丸瓦を用いており、金堂・塔・回廊など伽藍主要建築の竣工後、これらの施設を建設し始めたことがわかる。すなわち、C期の遺構は、境内周辺地区を対象とする第2次伽藍整備にともなうものとみなせよう。(浅川滋男)

軒丸瓦			軒平瓦			道具瓦等			
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数		
6133	C	1	6642	A	1	丸瓦	1		
	N	1		6663	A	1	その他	1	
6225	E	1			C	3	文字瓦		
	6235	C	15		?	1	点数	_____	
		I	3	6710	A	2			
6235	?	1	6721		C	1			
6301	B	1			G b	1			
6311	B a	1	6732	A	1				
6313	A	1	6739	A	1				
	H	1	6761	A	11				
6316	K	1	6764	A	5				
6348	A	1	型式不明		1				
新形式		1				丸瓦			
型式不明		2				重量			305.1 kg
						点数	1,877		
						平瓦			
						重量	871.4 kg		
軒丸瓦計		31	軒平瓦計		29	点数	6,451		

表10 第223-21次出土瓦集計表

17 西大寺境内の調査

第223-11次

史跡西大寺伽藍の中枢部、東塔跡の東南東100mの地点に木造多層塔を新造する計画があり、その事前調査として発掘を実施した。調査期間は1991年9月12日～10月7日、面積は472㎡である。調査地の現況は参拝者用の駐車場で、それ以前は藪地であった。塔の建設位置に合わせ東西約24m、南北約20mの範囲を調査した。

1 遺 構

調査区はほぼ全体が池跡にあたる。遺構は池とその堤、埋没した池跡に設けた導水管、溝2条などがある。

SG01 池は発掘区の全域におよび、西岸とある時期の北岸の一部を検出したが、

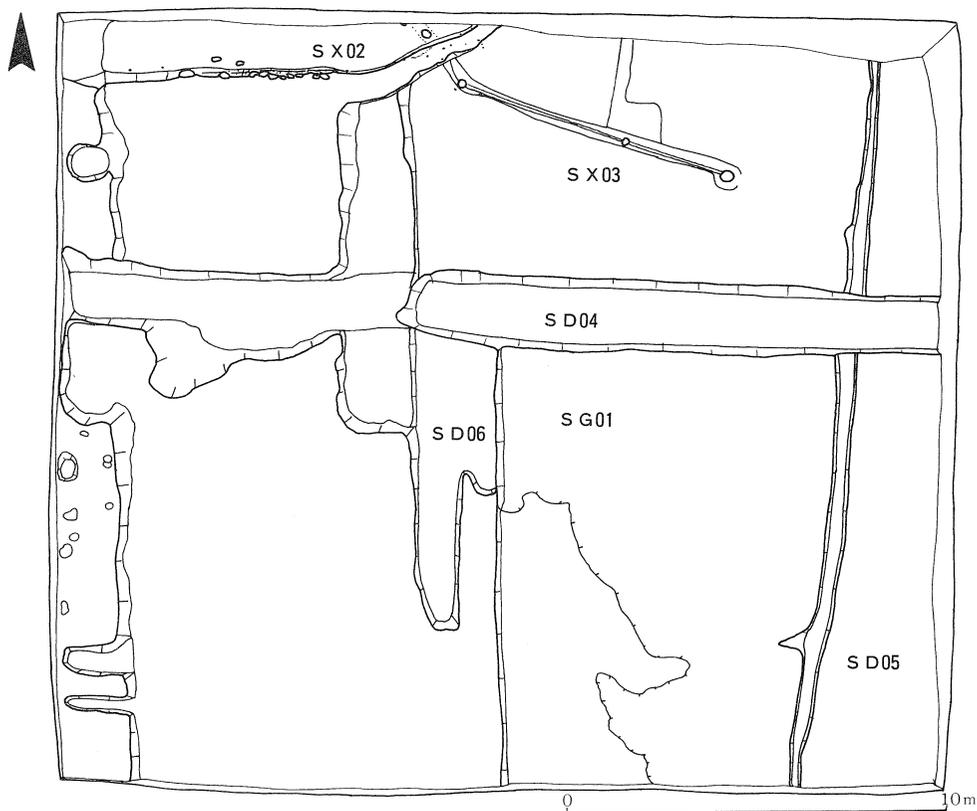


図59 第223-11次遺構図 (1/200)

南岸・東岸は未検出である。現在、南岸・東岸に関する手懸はないが、北岸については、発掘区の北、四王堂との間に小さな池があり、SG01の北岸がここまで延びていた可能性がある。池は何度かの埋立てを行い、次第に規模を縮小した。この埋土から大量の瓦、少量の瓦器が出土。軒瓦類は近世を主とし古代・中世の瓦を含む。

SX02 SG01の北岸にあたる堤。幅約0.8m。両側に杭をうち、割竹を網代組みにして護岸とする。発掘区の西北隅では、護岸の南側にさらに玉石を置く。この堤は江戸末期以降に、付近の堆積土を一部掘り込み施工している。

SX03 SX02と重複する導水施設。節を抜いた青竹を松の一木のジョイントで繋ぐもの。ジョイントは発掘区の壁に懸かった物を含め4個を検出。この施設はSG01がかなり埋没した段階に設置し、その後、堤SX02を設ける。SG03とSX02の前後関係は時期差というより、作業手順の差であろう。

軒丸瓦			軒平瓦						道具瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数	
6133	S	2	6641	E	1	327	A	4	埴	39	
6139	A	1	6663	C	1	330	A	4	鬼瓦	9	
6236	A	2	6664	?	1	333	A	6	その他	2	
6316	?	1	6685	A	1		B	1	文字瓦		
6348	A	1	6702	F	1	344	C	2			
53	A	1	6712	A	1	345	B	3	刻印瓦	2	
82	A	5	6732	K	3	348	A	1			
84	A	5		Q	8		C	1			
	B	1		?	1	349	A	1			
			262	A	5	350	A	4			
			268	A	16	351	A	1			
			273	A	1	353	B	2			
			276	A	1	362	A	3			
			288	A	33	363	A	1			
			303	A	4	364	A	1			
			304	A	1	365	A	1			
			307	A	3	367	A	1			
			308	A	5	368	A	1	丸瓦		
			309	A	11	372	A	1	重量	1,894.4 kg	
			310	?	1	375	?	1	点数	7,536	
			312	A	2	392	E	1			
			317	A	1		?	31			
			323	B	1	395	A	2			
			325	A	5	型式不明		25	平瓦		
									重量	5,315.9 kg	
軒丸瓦計		180	軒平瓦計						207	点数	23,720

表11 第223-11次調査出土瓦集計表

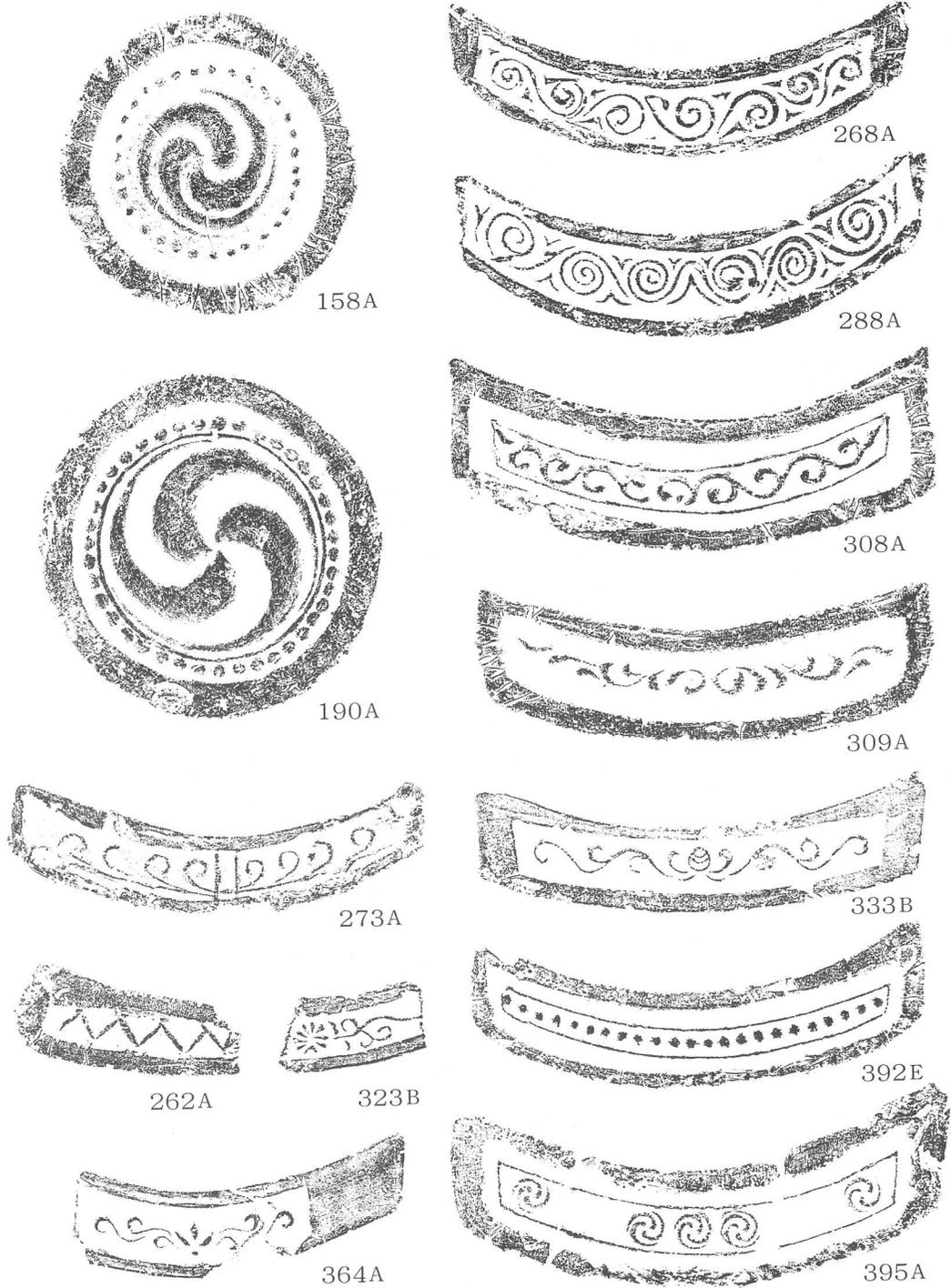


图60 第223-11次調査出土軒瓦 (1/4)

東西溝 S D 04 幅約1mの東西溝。15m分を検出。S G 01が完全に埋設した段階で掘った瓦捨ての土壌。近世の瓦片が多量に出土した。(金子裕之)

2 遺物

大量の遺物のうち、ここでは瓦磚について報告する。

軒丸瓦180点・軒平瓦207点をはじめ、完形資料を含む大量の瓦磚が出土した。創建期の軒平瓦248 (6732) Qがやや目立つのを除いて、奈良時代のものは少なく、平安時代以降の瓦が大半を占める。

軒平瓦で最も多いのは巴文の158Aで、28点が出土している。不明瞭だが、珠文帯の両側に圈線をめぐらす。190Aは、鳥衾として製作された大型品である。

軒平瓦では、渦文状の唐草文をもつ268A・288Aが、それぞれ16点・33点と多い。今回、288A・Bは同範であることが判明したので、B種を消去する。胎土・焼成や技法的特徴など、共通性が強い。『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』では四王堂所用瓦とし、1138 (保延4) 年頃の年代を想定した瓦である。一方、392Eを代表とする連珠文軒平瓦もかなり出土しており、このほか309Aも比較的めだった集中を見せる。262A・273A・364A・395Aは、今回の調査で初めて出土した新出の型式、323B・333Bは新種である。(小澤 毅)

3 まとめ

今回の調査によって、西大寺伽藍地内にかなり大規模な池の存在が確かめられた。この近辺では、防災工事に伴う発掘調査が行なわれており、1987年の調査では、今回の発掘区の西方に池の北岸を検出している(『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』)。S G 01はこれと一連のものである可能性が大きい。S G 01の全体規模や上限は不詳だが、江戸の末か明治の初めには池を縮小し、沼状の堆積土を掘り込み導水(排水)管を設置し、それと交叉するように池の南堤を設けた。池の跡にはその後、境内から出た大量の瓦片などが投棄され、何度かの整地を経て今日にいたったことがわかる。(金子裕之)

右京一条三坊十六坪西北隅部付近における住宅の新築工事に先立って発掘調査を行なった。調査期間は1991年4月9～15日、調査面積は約110㎡である。

1 基本層位

調査直前までの営農を示す耕作土（厚約25cm）と耕作基盤土（厚約5cm）の直下に旧耕作土（厚約15cm）と旧耕作基盤土（厚約8cm）があり、その下層に奈良時代の整地土と地山が続く。地山は西から東に向かって緩やかに傾斜する黄褐砂質土で、この上面に地山にきわめてよく似た暗黄褐粘質土の奈良時代の整地土が西から東に向かうにしたがって厚く堆積している。

2 遺 構

奈良時代の遺構として、幅約2.3m、深さ約20～30cmの南北素掘溝 S D 5615 を調査区東辺で検出した。調査区南端で西方に向かって垂直に曲がる様相を呈する。堆積土は2層で、上層から比較的多くの奈良時代後半の土器片や少量の瓦編が出土した。その他の東西溝は、いずれも中世以降の耕作に伴う溝である。また調査区東南端の土壇状掘形 S K 5620 は旧耕作基盤土の上面で検出し、内部の堆積土が

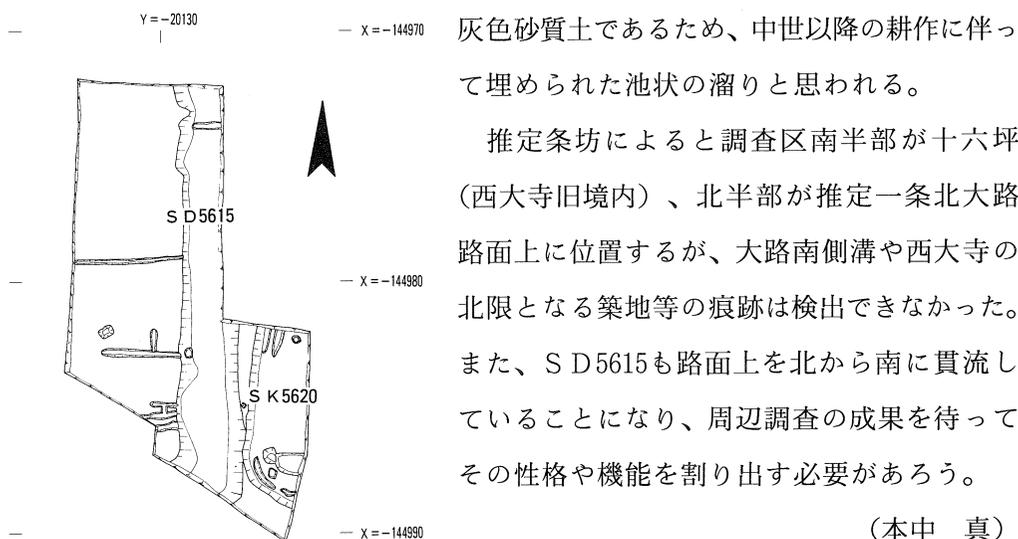


図61 第223—1次調査遺構図（1/300）

19 海龍王寺旧境内の調査

第223-18次

1 はじめに

当研究所は、海龍王寺旧境内において、これまで三次にわたる調査を行ってきた。まず、推定寺地東南部にあたる、現参道南側の調査（1969年）においては、奈良時代にさかのぼる堀立柱建物を検出し、寺創建時のものと推定した。次に、防災工事に伴う調査（1970年）では、中門・回廊の一部を確認し、東西僧房の位置を推定した。さらに寺地北方の調査（95-2次、1975年）では、東西築地及びその北方に奈良時代の東西溝を検出し、いずれかが寺地の北限を示すものと考えられた。

本年度の調査は、住宅建設に伴う事前調査であり、旧寺地内の北部、現本堂すなわち旧中金堂の真北にあたる。発掘面積は60㎡、12月6日に開始し同20日に終了した。

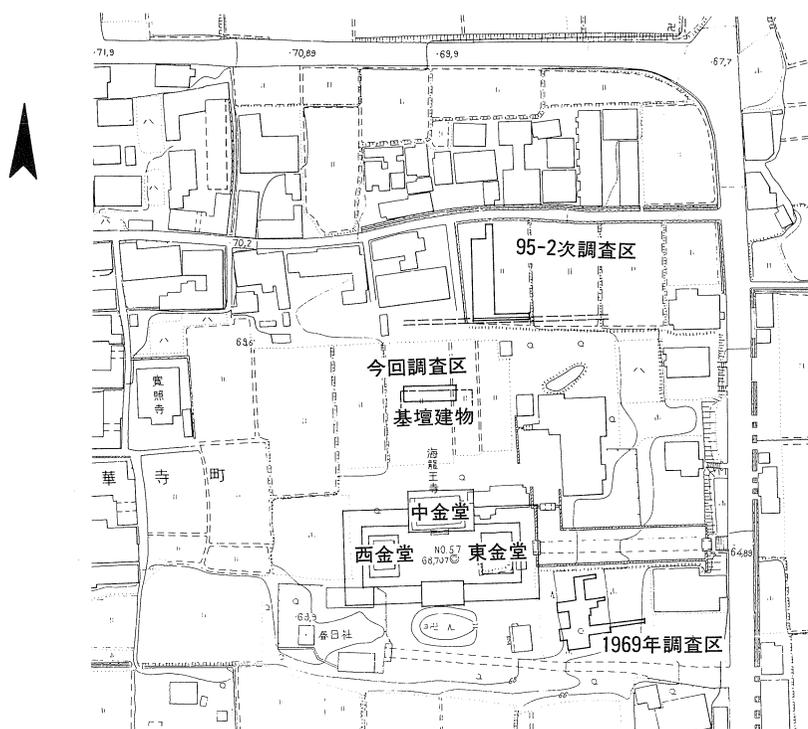


図62 海龍王寺旧境内の調査位置図

2 遺 構

検出した遺構は、東西棟建物基壇の一部とその外装凝灰岩の残欠、及び後世の不整形の攪乱坑が主である。基壇は、発掘区の東端及び西半北側で大きく削平を受けているが、15mに及ぶ発掘区の東西全域に及び、さらに発掘区外に広がる。発掘区の中央やや東北寄りに、基壇北側の化粧材と推定される凝灰岩の残欠が、1.7mの長さ亘って当初の位置に残り、発掘区が基壇の北端部分に当り、基壇は発掘区の南に続くことがわかる。以上の点から、検出遺構は奈良時代の、かなり大規模な建物の基壇であることはまずまちがいのない所と思われるが、建物そのものについては、柱位置を明確に示す遺構を得ておらず、手がかりはない。

一方基壇の造成は、発掘区内に限っては地山を削り出して行なっており、残存高は20cmであるが、このあたり一帯が溜池となっていた時期があり、基壇に礎石等の痕跡を留めないことなどからも、全体にかなりの削平を受けているものと考えられる。ただし、基壇化粧から90cm南に、幅18cmの凝灰岩切石が東西に並んだ状態で検出されており、地覆石の可能性をも持つが、基壇土を切り取って据え付けられており、現段階では後世の二次的な施設と判断している。

発掘区西半の攪乱部分には、長径90cm、短径60cmの下面が平坦な自然石一個と、径20~30cmの多数の玉石が散乱しており、礎石及びその根石が投棄された可能性を持つ。この攪乱坑は後世再び埋め立てられ、その上面におびただしい量の瓦片を置いて地固めとしている。

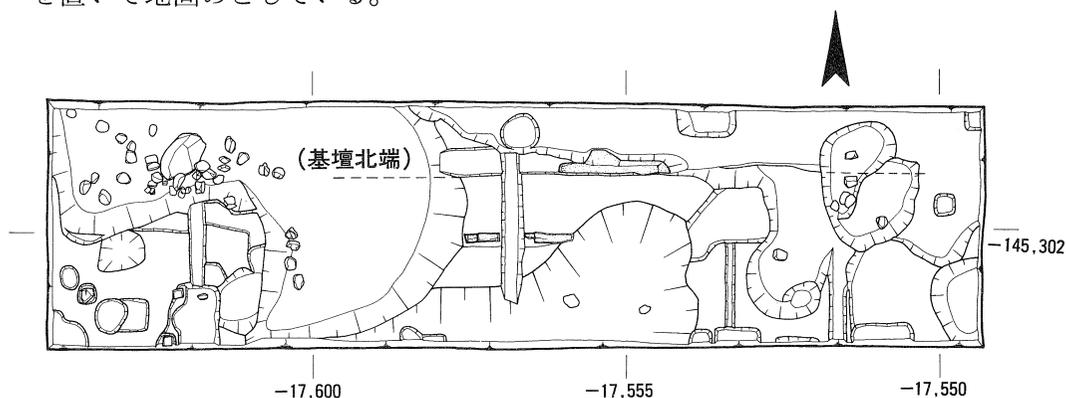


図63 第223—18次調査遺構図 (1/120)

3 遺物

発見された遺物は瓦に限られ、大半は中世以降のものであるが、奈良時代の軒丸瓦・軒平瓦を混じえる。このうち6721形式の軒平瓦は、これまでの調査でも最も多く出土しており、6282形式の軒丸瓦と共に奈良時代の海龍王寺所用瓦の主体をなすものである。なお、7世紀にさかのぼる瓦は、今回は発見されていない。

4 基壇建物の比定

以上述べたように、中金堂北方に大規模な基壇建物があったことが確認された。建物は、1) 凝灰岩の基壇化粧を有し、2) 東西長は15m以上に及び、3) 北端が現本堂の北側から約30mの位置にある。これまでに中金堂北方では、石敷があること、及び東僧房の位置が推定されたこと以外には堂舎の確認がなされていない。しかし絵図に表されたものがあるので、ここで遺構との比較検討をしておこう。

まず、延文元年五月の記のある「南都海龍王寺寺中伽藍坊室之繪図」には、中金堂と東西両金堂は描かれるが回廊は失われ、中金堂北に講堂、さらにその北に入母屋造基壇建の堂（名称部分が剥離して不明、食堂か。）がある。講堂東西に南北棟の東室・西室を描く。次に、14世紀と推定される「海龍王寺尼別受指図」には、伽藍主部の平面が描かれ、中金堂、東・西金堂、講堂、東・西僧坊の位置関係は上記の絵図とほぼ合致している。中世の伽藍の状況については、両図をほぼ信頼し得るものとおもわれる。講堂の位置は、両絵図ではすくなくとも僧坊の桁行の範囲にはおさまり、またその前面が僧坊の南妻に近く描かれている。したがって講堂と中金堂も、さほど間隔をあけていないと推定される。

以上を前提とすると、今回検出した遺構は、延文絵図に描かれた講堂北側の堂（食堂か）の基壇に該当する可能性が高いと考えられよう。奈良時代の海龍王寺伽藍の一端を確認し得たことは大きな意義があり、今後は寺地の範囲の確認と共に全体の伽藍配置、さらに平城京条坊との関係などがより明らかにされることが期待される。

（松本修自）

20 薬師寺宝積院の調査 第223-3次

1 はじめに

宝積院は薬師寺北門を入れてすぐ東にあった子院である。寺蔵の古図によれば、17世紀中頃に遡るようだが、この地は奈良時代には苑院であったと推定されている。当該地の調査はかつて昭和53年12月に庫裡新築に伴って実施し、当時からうじて残存していた宝積院西面土塀際で、江戸時代の瓦を子羽立てして化粧した宝積院東門S B07と東雨落溝S D06、土壙S K04及び近世の溝S D09とこの埋土を切る井戸S E08などを検出した。また下層では東西溝S D02、平安末を中心とした時期の池状の大土壙S K01、奈良時代の掘立柱南北塀S A10、古墳時代の蛇行溝S D03・05などを検出した。

今回の調査は、前回の調査地の東で、新たに庫裡建設の申請が提出されたことから、平成3年5月29日から6月29日まで、約200㎡について実施した。

2 遺構

調査地の土層は、上から0.5~1.0mの盛土、0.2~0.3mの畑耕作土、0.1~0.3mの中世の遺物包含層である茶灰褐色土の順で、この下では一部に奈良時代の整地土が残るが、大部分を池S G20の埋土とS G20造成に伴う整地土面が占める。奈良時代整地土（厚さ0.1~0.2m）には古墳時代の土師器細片を含む暗褐色砂質土層（厚さ0.1m）があり、以下は青灰色シルトの地山となる。

検出した主な遺構は、奈良時代の土壙S K18、平安時代末の池S G20とこれに注ぐ細溝S D24、S G20造成土下の炭・灰を多く含む大土壙（以下炭土壙）S K11~14・17・22・23、池埋没後の大土壙S K15などである。

池S G20 蛇行する池で、南岸中央には出島がある。東半部の汀には人頭大の石やその抜取り痕が処々にあり、とくに出島東岸では比較的密に石が残るが、池西半部では石もしくはその抜取り穴は疎らで、西と東ではやや様相が異なる。池の深さは0.4~0.6m。池底のレベルは西から東に漸次低く、比高差は南西部と出島付近とが0.2m、出島先端部と出島東辺とが0.2mだが、出島東辺から池南西部に

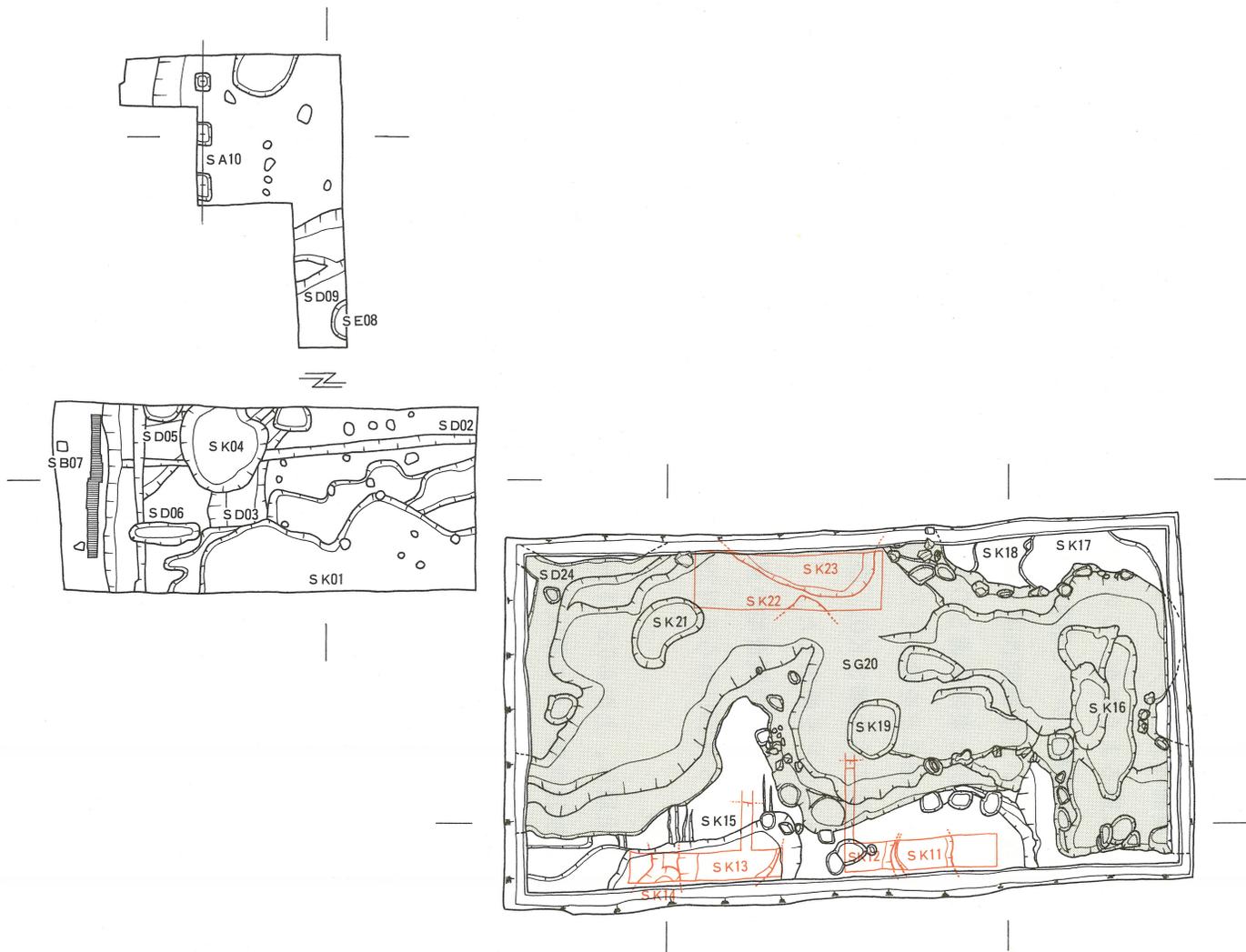


图64 223-3次遺構図 (1/200)

かけては比高差0.8mとかなり低くなる。水は南西からひき、東南に抜いているが、他に北西の溝S D24からも池に注いでいたと推測できる。池の東端は不明だが、西は前回調査した池状の土壌S K01に連なる可能性が強い。

池の埋土は、底から厚さ0.2～0.3mの暗褐色土・暗灰粘質土・褐灰色砂質土（以上、下層）と、厚さ0.2～0.4mの黒灰色土・焼土層（以上、上層）からなる。褐灰色砂質土は岸近くにのみあり、焼土層（厚さ0.1～0.3m）は出島より東にあった。この焼土層は建物の焼壁を多く含む。なお、S G20の底には池造成時に設けた深さ0.2～0.4mの土壌S K16・19・21がある。魚溜まりのような施設であろう。炭土壌S K11～14・17・22・23 池造成に伴う整地土下で検出した楕円状の大きな土壌で、一部を発掘したにとどまる。深さ0.5～0.8m。いずれも厚さ0.1～0.2mの炭・灰の堆積がある。とくにS K23では、底近くで細砂と炭・灰層が1～2cmごとに7～8層互層になり、また上層では焼壁も出土し、近くに恒常的に火を焚く施設があったことが窺われる。S K14がS K13によって切られている以外重複はない。

3 遺物

中世の遺物包含層である茶灰褐色土や池S G20の埋土からは多量の土師器・瓦器などが出土した。また、瓦もかなりの量（軒瓦計185点）が出土している。以下では、主にS G20の上層と下層、それに炭土壌S K11～14・17・23の遺物について記述する。炭土壌の遺物はそれ程多くない。

A. 土器

炭土壌及び池の上・下層から出土した土器には、瓦器碗・皿・鉢・華瓶・盤（火鉢?）、土師器皿・台皿（托?）・高杯・耳皿・甕・羽釜、須恵器鉢・甕、白磁碗・皿・瓶、青白磁合子などがある。なお、黒色土器は碗Bの細片が少量出土している程度でこの時期には使用されていなかった可能性が強い。

まず、主な器種の器形について系統区分を行っておく。瓦器碗には、高台が直で太く、端部が丸味をもつA、高台がやや外反気味で細目のB、高台外の体部との境に突帯をめぐらすC、高台内に突帯をめぐらすDの少なくとも4系統と、少量の小型碗などがある。瓦器皿には高台のつかないものと少量だがつくもののが

あり、ともに底部から体部が急角度に立ち上るCとなだらかに立ち上るDの2系統がある。瓦器鉢にも高台のつかないものとつくものがある。

土師器皿には口径9.1～11.8cmの小皿と、口径12.9～16.1cmの大皿とがある。小皿には口縁端部を内に折曲げ、あるいは引き出して玉縁状につくるいわゆる「ての字」口縁のAとB、口縁端部がやや外反するC、口縁端部が直のDの主に4系統、大皿には小皿C・Dに対応するC・D2系統がある。台皿には高台が直で、口縁が「ての字」のB、口縁が直もしくは外反し、高台がやや外反するC、Cに似るが高台外端を玉縁状に肥厚させるDの主に3系統がある。高杯には脚部を八面取りするA、12面取りして杯部との境に段をつくるB、耳皿には耳を水平に折り曲げるA、直に折り曲げるBの、各2系統がある。

土師器羽釜は菅原正明氏の分類と編年(注1)、須恵器鉢は東播系であり神出古窯の分類と編年(注2)、白磁については横田賢次郎・森田勉氏の分類・編年(注3)に準拠する。また、土器年代については、川越後一氏の瓦器碗編年(注4)に準拠する。なお、池上層の土器は未整理なので、概略を記すにとどめる。

炭土壌SK14出土土器(図65, 1) 瓦器碗B(1)は内外面に底近くまで密にしかも強くヘラミガキ(暗文)を施す。外面のミガキは四回にわけており、ミガキの前に体部をヘラケズリする点は古調、見込みの暗文は比較的密なジグザグ文。厚手で、口縁内端の沈線の位置は低い。色調が灰褐色系の土師器小皿C・Dの小片も出土。

炭土壌SKS13出土土器(図65, 2～15) 瓦器碗A(13)はSK14出土瓦器碗とほぼ同工だが、高台端にもヘラミガキを施すのは唯一例。体部内面に「キ」と焼成後に針書き。見込みの暗文はないが、3回転の独立した螺旋状暗文を施す例もある。瓦器碗Cは高台が細く高い。腰の突帯は細く、この上にもミガキを施す。瓦器小碗(12)は13とほぼ同工。見込みの暗文はない。

土師器小皿はA(2)・B(3・4)・C(5)・D(6)各種がある。調整は底部無調整のe手法、色調は一部に赤褐色ないし黄褐色をおびるものもあるが灰褐色系が主。小皿A・Bは口縁部がほぼ水平で、器高も低い。小皿Aには口縁端部

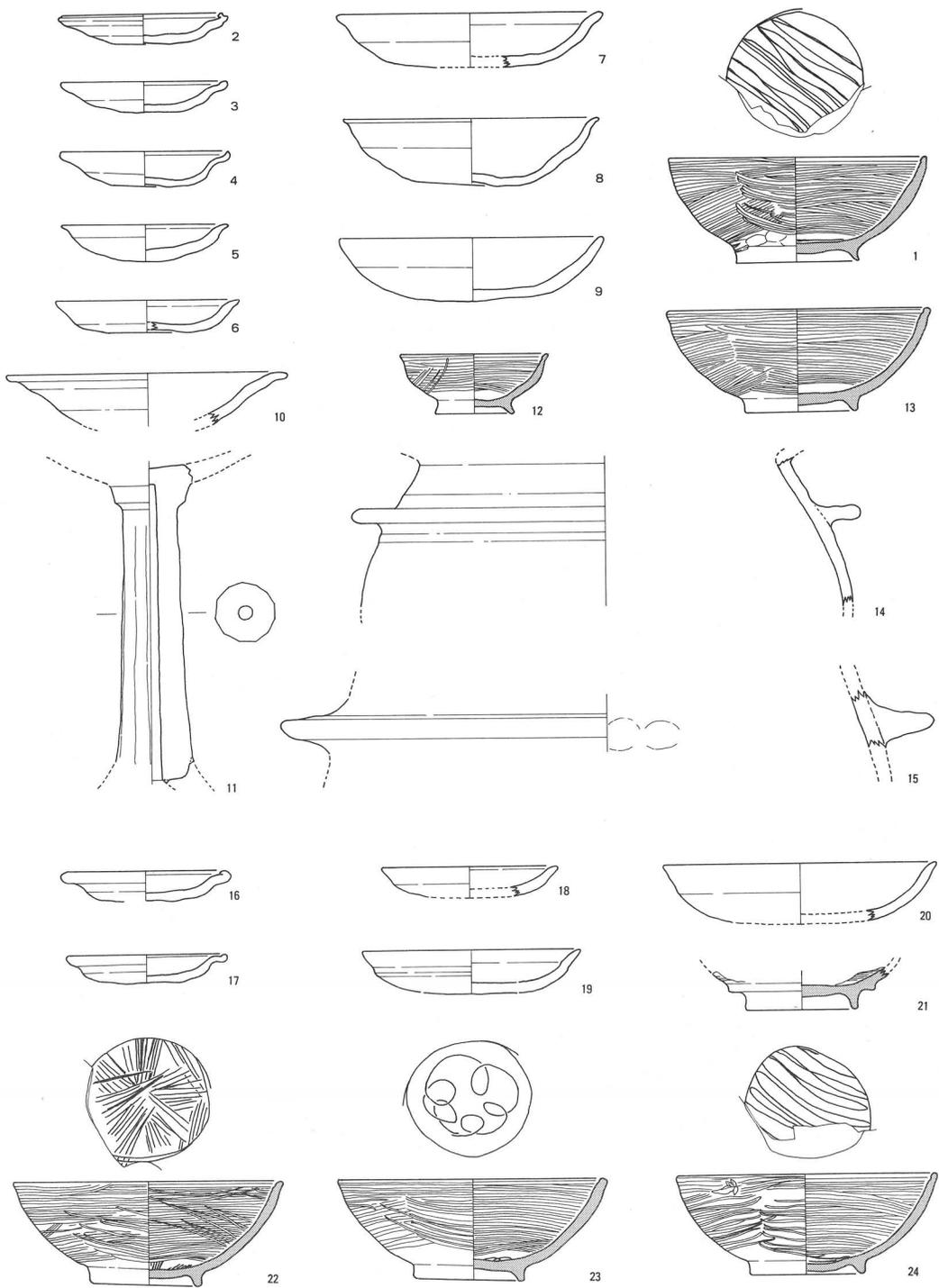


图65 炭土壙出土土器 (1/4)

を折曲げた玉縁が大きい厚手のものと玉縁が小さくやや薄手のもの、厚手で大きな玉縁の端をさらに外にひき出す2とがある。小皿Bの3は口縁端のひき出しが高く太い。土師器大皿はC(7・8)・D(9)が出土。粘土紐を巻き上げてつくり、底部外面の一部にナデ調整を加える。色調は灰褐色系が主。大皿Cの口縁の外反はそれほど強くない。8のように皿というより杯に近い深目のものもある。大皿Dにも通例のものやや深目の9とがある。土師器高杯B(11)は淡灰褐色で焼成が堅緻。脚部は12面取りののちヨコ方向に回転ナデを加える。口縁部がゆるやかに外反する杯ないし皿部の破片(10)もある。土師器羽釜B(14・15)は鏝が太くて長いのが特徴。他に須恵器甕などの破片も少量出土。

炭土壌SK12出土土器(図65, 16~24) 瓦器碗A(22~24)は新旧二種がある。22はSK13の瓦器碗Aとほぼ同土だが、体部外面のミガキはやや弱く、高台にもミガキを加えない。見込みの暗文は放射状。この一群には口縁が歪んだ沓茶碗風の完成品が一点ある。見込みの暗文はやや粗いジグザグ文。23と24は外面のミガキを高台から1.5cm前後離れて施すようになる。23は外面のミガキが密だが弱く、3回にわけて施す。見込みの暗文は3回転の独立した螺旋文。24は外面のミガキを4回にわけて施すが粗い。ミガキ前にヘラケズリを施さない初出資料。見込みの暗文はやや粗いジグザグ文。焼成前に口縁外面に五葉文を線刻。瓦器碗C(21)は腰の突帯が太くなり、ここにはミガキを加えない。見込みの暗文はやや粗いジグザグ文。

土師器では、小皿A(16)・B(17)・C(18)・D、大皿C・D(19・20)がある。灰褐色系でSK13出土品と大差はない。

炭土壌SK23出土土器(図66, 1~10) 瓦器碗D(10)は外面をヘラケズリ後、ミガキを底近くまで密に施すが、ミガキはやや弱く、線が細くなる。土師器小皿にはA(1)・B(2・3)・C・D(4)、大皿にはC(5~7)・D(8・9)がある。Aの13の外底には「十」のヘラ記号がある。小皿Bには13のように口縁端部のひき出しが低いものが出現する。大皿Cには口縁端の外反がやや強い13と弱い13とがある。前者は底部外面が無調整で、底部内面をハケ目調整する。また胎土

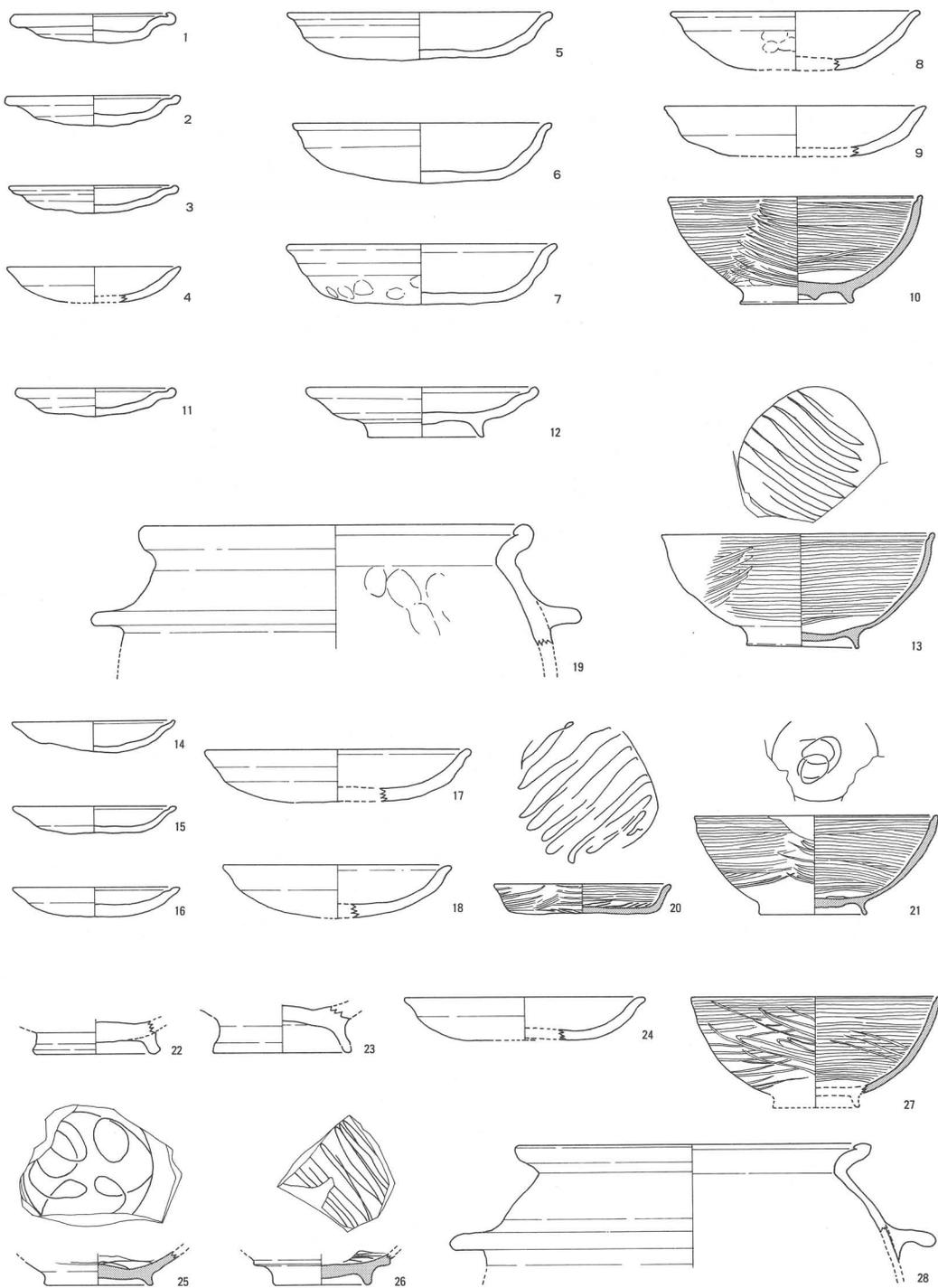


图66 炭土墳・池整地土出土土器(1/4)

に雲母を含み他と異なる。色調は淡褐色。後者は底部外面の一部をナデ調整。灰褐色系。白磁椀V1の小片も出土。

炭土壌S K 11出土土器 (図66, 11~13) 瓦器椀AとB (13) とがある。Aは底部の破片で、見込みの暗文はない。Bの13はやや薄手だが、外面をヘラケズリしたのち、比較的密なミガキを施す。見込みの暗文はやや粗いジグザグ文で、ジグザグ文を交叉させたものもある。土師器小皿Bは口縁端のひき出しが太いものと、細く低い11とがある。土師器台皿B (12) は、口縁端のひき出しがやや太目だが、口縁部は立上がり気味。色調は暗褐色系。

炭土壌S K 17出土土器 (図66, 14~21) 瓦器椀AとB (21) とがある。Aは底部の破片で、高台はやや小型になる。見込みの暗文はやや粗いジグザグ文。Bの21はS K 11の瓦器椀Bとほぼ同工だが、口縁内端の沈線の位置が高くなる。見込みの暗文は、渦文に近い3回転の独立した螺旋文。ジグザグ文もある。瓦器皿C (20) は平底で、口縁部内面に密に、口縁部外面と一部底面外面にやや粗いヘラミガキを施す。見込みの暗文はジグザグ文。

土師器小皿はA・Cの破片とB (14~16) とがある。Bには口縁端部のひき出しが太いものもあるが、16のように細く低く、しかも口縁部が水平でなく立上がり気味のものが出現する。土師器大皿C、台皿Cの口縁部の破片もある。羽釜B (19) はS K 13出土品より鏝がやや小さくなる。

池S G 20整地土出土土器 (図66, 22~28) 瓦器椀A (27) は口縁内端の沈線の位置が高いが、S K 17出土瓦器に比して外面のミガキはやや粗となる。見込みの暗文は2重の螺旋文とジグザグ文とがある (25・26)。瓦器椀CはS K 12出土例と大差ない。土師器小皿A・B、大皿C (24) ・D、台皿C、高杯B、甕、羽釜Bの客破片がある。大皿Dに灰白色系のものがあるのは初出。台皿Cのうち22は高台が低く、23は高台がとくに高い。羽釜B (28) はS K 11とほぼ同土だが、胎土の砂は少なく、比較的焼きもよい。口縁外端と頸部内面が尖り気味なのは特異。なお、土師器椀と推定される小さな高台も出土。

池S G 20下層出土土器 (図67・68) 瓦器椀はA (26) ・B (27・28) ・C・D

(23~25) がある。Aの26は見込みに2重の螺旋状暗文を施すもので、暗文の前に底部内面をハケ目調整する。Bの27・28はSK17よりより薄手で、外面のミガキはより粗く、体部上半部程度になる。また、高台も低く小さくなる。見込みの暗文は粗いジグザグ文。量的にはAよりはるかにBが多い。Cは小片で、すでにこの段階では使用されていなかった可能性が強い。Dの24・25も外面のミガキが粗く、高台が小さく低くなる。見込みの暗文はジグザグ文と2重螺旋文。ジグザグ文を交差させる23は古調。瓦器小椀(22)は外面のミガキが粗くなる。口縁内端の沈線の位置がまだ低いのは瓦器椀Aの系統をひくためであろう。

瓦器皿はC・D(19)があり、台皿もC(20)・D(21)がある。Cにすべてのミガキ(暗文)を省略するものやDに外面のミガキを省略するものがごく少量あるが、大半は体部内面に密に、体部外面と底部を粗くヘラミガキする。見込みの暗文は、皿・台皿ともCはジグザグ文、Dはジグザグ文を交差。瓦器鉢(29・30)と台付鉢(31)は外面にもやや粗いヘラミガキを加える。ともに内面は滑らかで、捏鉢として使用。31の見込みには螺旋状暗文が残る。瓦器の片口鉢片も出土。

土師器小皿はA・B(1~3)・C(4~6)・D(7)、大皿はC(9)・D(10~13)がある。一部に灰褐色系があるが灰白色系がほとんどを占める。底部は無調整。小皿Aや、Bの1~3は口縁部が水平でなく立上がり気味となる。Bには2・3のように、体部の口縁部の境がはっきりせず、小皿Dに近い例が出現する。Cは口縁端の外反が強くなり(4)、一部には浅いものが出現する。大皿Cは口縁端の外反がまだ弱い、口縁部のヨコナデは位置が高くなる(9)。大皿Dには口縁部を2段ナデするもの(10・13)と、1段ナデするもの(11)があり、12のように浅目の大皿も出現する。

土師器台皿はB(14)・C(16・18)があり、D(15・17)・G(8)が出現する。Bには高台が低目のものと高い14とがある。Cには高台が低目のものととくに高い18とがある。16は皿部が平板なミニチュア。Gの8は糸切りの平高台の皿。羽釜B(41・42)は鏝が薄くなる。なお、土師器椀の高台と思われるものもある。

東播系須恵器鉢(32)は底部外面の突出が小さい神出右窯I2相当と推定。白

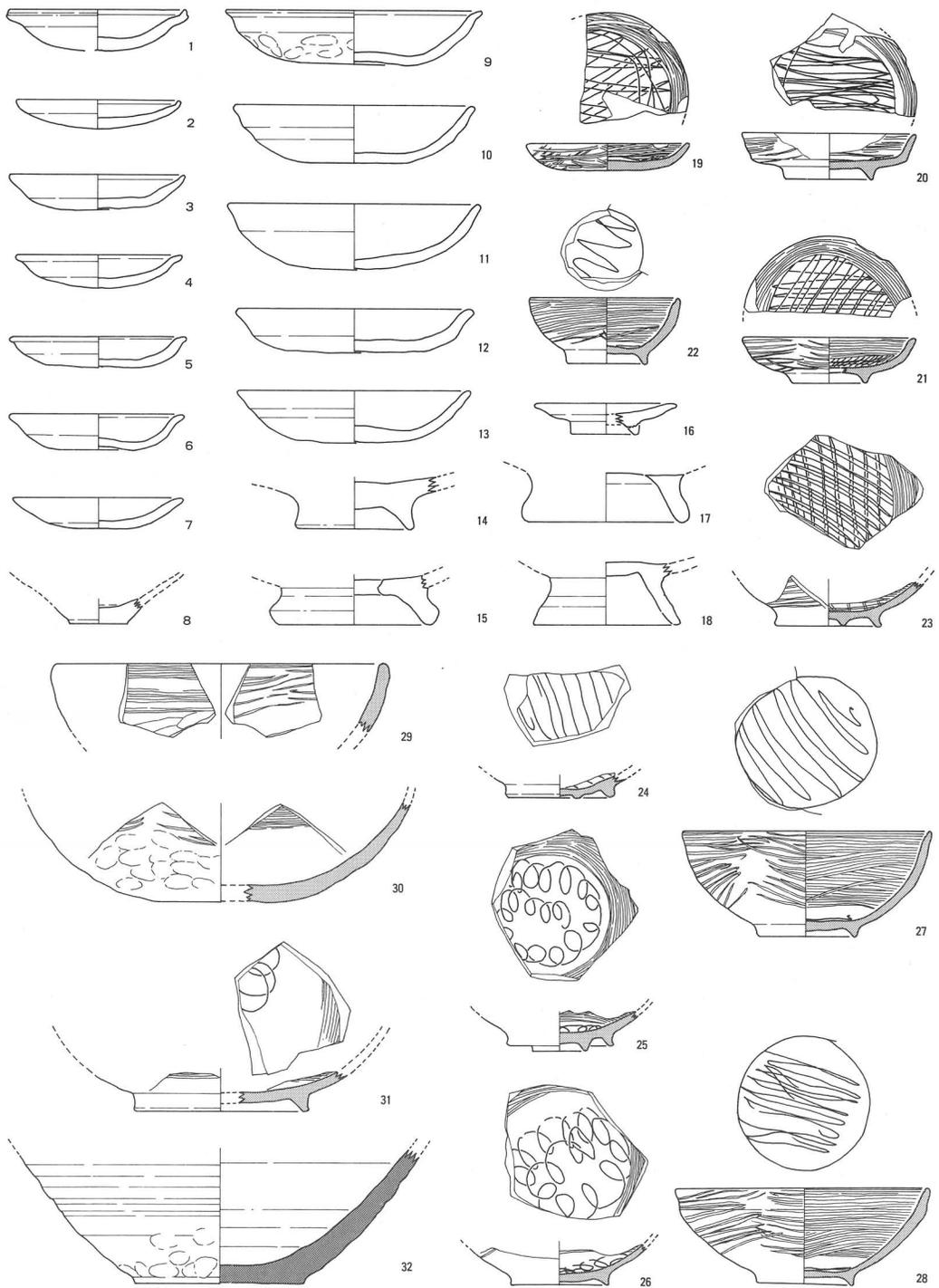


图67 池SG20下層出土土器 (1 / 4)

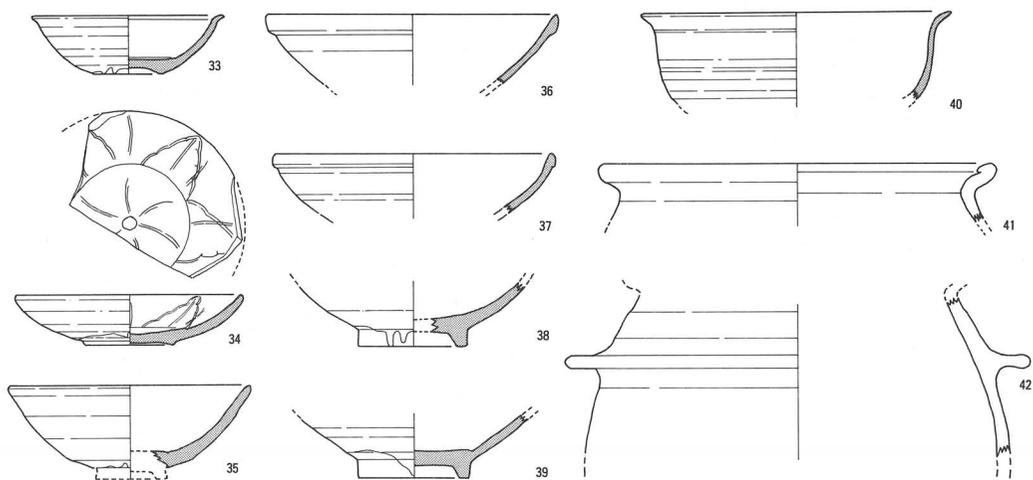


図68 池SG20下層出土土器（1／4）

磁は碗Ⅱ1（36・37）・Ⅳ1（38・39）・Ⅴ1（35）・Ⅴ2、皿はⅥ2・Ⅶ1b（34）及び口縁端が外折するもの（33）がある。

池SG20上層出土土器 瓦器碗はA・B・D・があり、Eが出現する。Bが主体でEがこれに次ぐ。Aは外面のミガキを体部上半に粗く施し、口縁内端の沈線も位置が高くなる。見込みの暗文は粗いジグザグ文。Bは外面のミガキを体部の1／2～1／3にかなり粗く施し、高台も断面三角形に近くなる。見込みの暗文は粗いジグザグ文。Dは高台が圏線状に低くなる。見込みの暗文はジグザグ文を交差。Eは高台が断面三角形の低いもので、口縁内端の沈線は上端にめぐる。薄手で、外面のミガキは体部の上半ないし口縁部近くに粗く施す。内面のミガキもやや粗い。口縁端が直のE1と外折するE2とがあり、それぞれ高台に大小がある。見込みの暗文はE1が独立した3回転ほどの螺旋文。E2は独立した渦状の螺旋文だが、後者は量がきわめて少ない。小碗は高台が低くなるが、口縁内端の沈線はまだ位置が低いものと、沈線の位置が高く、外面のミガキが口縁近くに限られる（見込みの暗文は粗いジグザグ文）ものがある。また、前者には口縁部が強く外反し、見込みに2重の螺旋状暗文あるいはジグザグ文を施す特殊な一群がある。

瓦器皿はC・Dがあるが、台皿はなくなる。C・Dとも外面のミガキは施さず、体部内面のミガキも施さないものが出現する。見込みの暗文は粗いジグザグ文が

主で、一部に交差させるものもある。鉢は内外面にやや粗いミガキを施し、口縁内端やや下に沈線をめぐらすものと、台付で見込みにジグザグ文を交差させた暗文を施すものがある。瓦器盤は初出で、内外面に比較的密にヘラミガキを施す。華瓶も初出である。小型品だが外面にヘラミガキを施す。

土師器小皿はA～Dがあり、Eが初出。大皿はC・Dがあり、Fが初出。底部は無調整。小皿A～Cは下層とそれほどの大差はない。量は少なく、とくにAは微量。量が多いのはDで、浅目のものが主体。Dには砂粒を多く含む浅い小型品も出現する。Eは口縁端が内に巻き込む平底のいわゆるコースター形。巻き込みの強いものとやや弱いものがある。Fは体部が底部から折れ気味に立上る皿。大皿Cは口縁端部の外反が弱く、口縁部を2段ナデするものと、1段ナデで口縁端部が強く外反するものがある。後者が主。Dは1段ナデで浅目のものが主となる。大皿Fは小皿Fに対応するもの。台皿はB～D・Gがあり、Eが初出。主体はC。Cの脚部・口縁部とも外反が強くなる。特大品もある。Eは小皿Eに台を付けたもので、口縁端の巻き込みが大きく古調。他に土師器は、高杯A・B、耳皿B、羽釜Bなどがある。耳皿Bは耳をわずかに折り曲げるもので、小型品もある。羽釜Bは鐙が短くなる。肩がやや張る例もある。小型羽釜B及び山城Eb・河内産D1bと推定されるものもある。

東播系須恵器鉢は神出古窯I1、II1がある。白磁は碗II1・IV1（底に「上」の墨書）・V1・V3・V4、皿IV2・VII16及び口縁端が外折するもの、瓶の口縁があり、青白磁合子やただ1点だが陶器の壺の口縁部と推定されるものもある。

土器の年代 炭土壙SK12～14・23の土器は、川越氏の瓦器編年IB、SK11・17は同ICにほぼ相当する。このうちSK11・12・23の土器は、SK13・14と次のSK17の土器とをつなぐ資料であり、IBの細分ができる。SK13・14をIB1、SK11・12・23をIB2と仮称する。実年代は、I世紀が11世紀後半～末であり、IB1が11世紀中頃、IB2が11世紀後半になろう。

池SG20下層の土器は、上記編年IDに相当し、上層の土器は同IIA～IIIAにほぼ相当する。IDの時期は、11世紀末頃で、下層出土の白磁も11世紀末頃から

の椀・皿が出土しているが、一部に12世紀初頭頃とする皿Ⅶ1bや、12世紀前半とする東播系須恵器鉢Ⅰ2も含む。ⅡA～ⅢAはほぼ12世紀代である。東播系須恵器鉢も12世紀中～後半のⅡ1、白磁・青白磁も12世紀代に納まる。ⅢAになる瓦器椀Eは量が少なく、主体はⅡA・Bだが、土師器小皿F、大皿F、土師器羽釜Bの一部などに12世紀末ないし13世紀に入る可能性がある資料もあり、上層の下限は今後更に検討を要する。

なお、11世紀に遡って、瓦器椀にはAとB、土師器小皿にはAとBあるいはCとD、大皿にはCとDというように、相似た器形だが系統の異なるものがあり、薬師寺に供給する複数の生産工人群の存在があったと推定できる。

土器の組成 炭土壌及び池埋土から出土した土器は、瓦器と土師器が大部分を占める。須恵器は整理平箱に2箱で、甕を主体とした壺・瓶・杯・鉢などの破片がある。ほとんどが奈良・平安時代前期のものと推測され、平安時代末頃の資料は東播系鉢の破片が合計すると約2・5個体分ある程度である。白磁は破片を合計すると椀約7個体分、皿約3個体分、瓶と青白磁合子各1片である。陶器は壺の破片1片である。

炭土壌及び池埋土の瓦器と土師器の合計（残存する口縁周合計／復原口径）は約2262個体で、瓦器：土師器の比率は1：3.9である。瓦器約464個体の内訳は、椀約396個体、皿約68個体で、椀：皿が5.8：1。うち小椀と台付皿は2.1個体と1.1個体と稀少。花瓶は1片である。土師器約1798個体の内訳は、小皿約1391個体、大皿約351個体、台皿約40個体、羽釜約8個体で、小皿：大皿：台皿が34.9：8.8：1。他に椀と推定されるものが約5個体。耳杯は約2個体、高杯は約2個体と稀少である。

以上のことから、薬師寺における平安時代末の土器の主な組成は、瓦器椀1に対してほぼ土師器小皿3～4、大皿1となる。土師器小皿B・C・Dには灯明皿として使用されたものもあるが、上記の組成が主要な食器を構成していたことはうごかない。瓦器皿や土師器台皿は小皿35、大皿9に対して1であり、さらに高杯・耳皿・磁器は稀少であり、特別な器であったと考えられる。数の少ない瓦器

小椀・台皿は、花瓶とともに小仏器（六器）として使用されたのかもしれない。なお、調理用の羽釜は小皿約181、大皿約46に対して1、須恵器鉢は小皿約556、大皿約140に対して1となる。

（毛利光俊彦）

B. 瓦埴類

今回出土した瓦のうち、土埴及びSG20下層・上層の軒瓦は、平安後期の編年を細分できる資料として重要であり、以下に詳しく述べる。

炭土埴出土軒瓦 1は薬師寺で初出の瓦。『薬師寺発掘調査報告』（昭和62年刊）の76に類似（以下報告76のように略す）するが、異範。2は報告87と同範。3・4は共に薬師寺で初出の瓦。5は報告80と同範。6は報告277と同範で、平等院例と同範であろう。7は薬師寺で初出の瓦。7は『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』（平成2年刊）の275Aと同範だが、西大寺とは顎の形態が異なる（後述）。7は平安宮真言院例と同範であろう。8は報告265とおそらく同範であろう。9は報告263と同範だが、顎の形態が異なる。10は薬師寺初出の瓦。10の範の下外区の線を太く彫り直したものが1点その他の遺構から出土しており、顎の形態も変化している。10は平安宮大極殿例と同範であろう。

SG20下層出土軒瓦 11は報告82と同範。12は薬師寺初出の瓦。報告56に類似するが、間弁の形態が異なる。13は薬師寺初出の瓦。『興福寺食堂発掘調査報告』（昭和34年刊）の36・37の瓦と類似する。14はSK14出土4と同範の瓦。15は報告89・88と同範。報告88は報告89の外区に一重の圏線を彫り加えたもの。15は報告88と同一で、同範は平等院・興福寺・法勝寺にある。16は薬師寺初出の瓦。平等院出土例と同範であろう。17は報告269と同範である。範傷及び範割れの経過から3段階に分けられ、最初の2段階は興福寺のみで出土し、3段階のものは薬師寺で出土していたが、今回出土の17は2段階目のものであろう。18は薬師寺初出の瓦で、全体の文様構成も不明である。19は報告285に類似するが異範である。

SG20上層出土軒瓦 20は報告52と同範で、直立する外区内縁に小さな珠文を配す。21は11と同範であろう。22は三巴左巻き文軒丸瓦で、薬師寺では初出であろう。23は薬師寺初出の瓦で、興福寺防災報告-152と同範であろう。24・25は薬

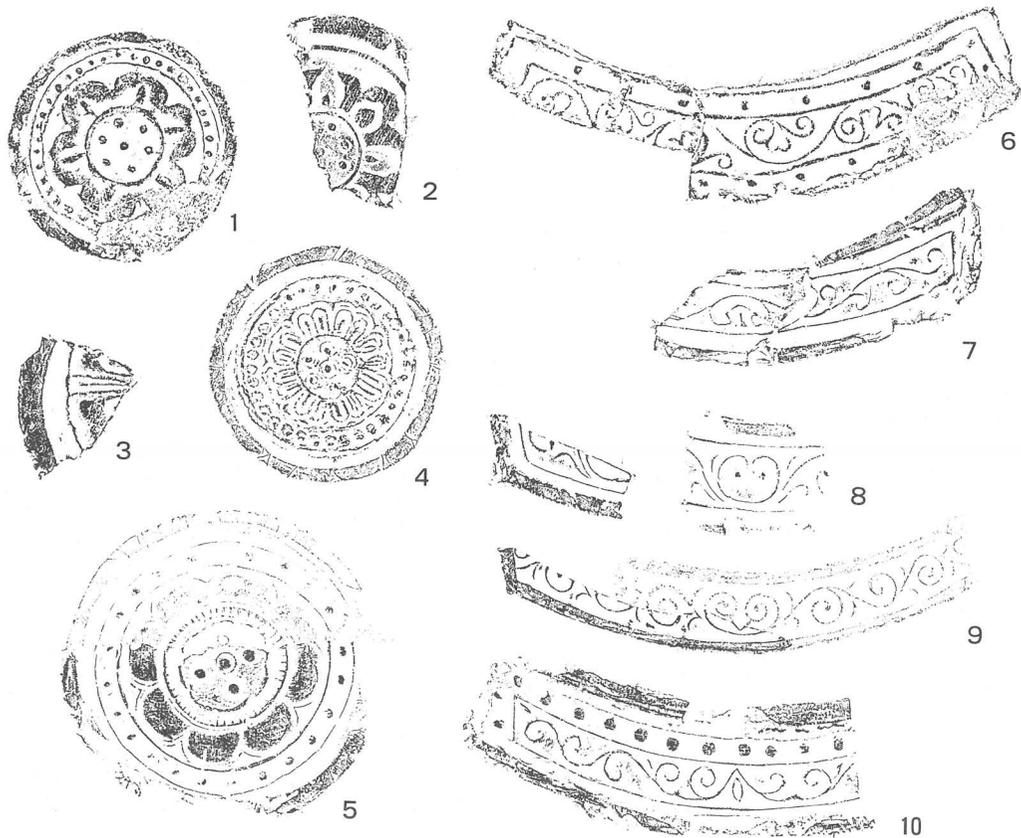


图69 炭土壙出土軒瓦 (1/4)

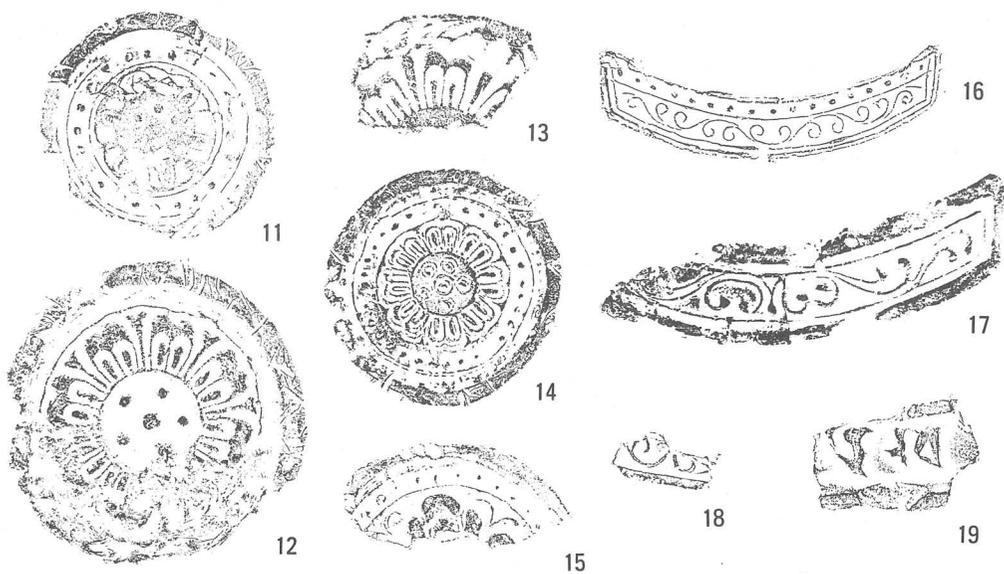


图70 池SG20下層出土軒瓦 (1/4)

遺 構	軒 丸 瓦	軒 平 瓦
土 拡	1 (S K14 炭層) 2 (S K14 炭層) 3 (S K14 炭層) 4 (S K14 炭層) 5 (S K14 炭層) 5 (S K14)	6 (S K14 炭層・下層) 7 (S K14炭層とS G20下層が接合) 8 (S K12) 9 (S K14) 10 (S K23)
S G20下層	11、12、13、14、15、6279-C	16 (3点)、17、18、19、6664-D、6641-G
S G20上層	20、21、22、21と同範か (2点)、 6276A、軒丸型式不明 (5点)	23、24、25、26、27、28、29、 6641 I、6663H、6663 I
そ の 他	5 (2点)、13、14、6276A、6234A b、梵 字丈軒丸 (2点)、薬師寺報告56と同範か (2点)、興福寺食堂報告38と同範か(1点)、 巴文 (3点)、軒丸型式不明 (5点)	9 (3点)、10 (1点)、16 (2点)、6663、 6641-G、6664-D、薬師寺報告236と同 範、薬師寺報告264と同範、薬師寺報告275 と同範、軒平型式不明 (2点)
	4 2 点	3 7 点

表12 第223-3次調査出土軒瓦一覧

師寺初出の瓦で、全体の文様構成は不明。26は報告285に類似するが、異範である。上外区に寺の刻印を押す。27は報告270と同範であろう。28は報告344と同範である。ただし、右端の唐草と右外区との間の間隔が、28では狭くなっており、28は報告344の範の両端を切り縮めたものか。29は薬師寺初出の瓦で、同範と思われるものが、興福寺（瓦又資料）にある。

軒平瓦の顎の変遷 層位的には、土壌→S G20下層→S G20上層の順であり、この順で出土した軒平瓦の顎の変遷をみてみよう。まず、S K14・S K12出土の6・7・8・10はいずれも、顎部と平瓦部凸面との段差が1.5cm前後あり、深い段顎となっている（顎Ⅰ）。次に、S G20下層の16・17・18はいずれも、顎部と平瓦部凸面との段差が0.5cm程度であり、浅い段顎である（顎Ⅱ）。ただし、顎Ⅱの中には明瞭な段顎（16・18）と不明瞭な段顎（17）とを含む。最後に、S G10上層の23・26・28・29では、丸みをもった曲線顎（顎Ⅲ）となっている。ただ、曲線顎とは言っても、0.2～0.3cm程度の段差は残っているものが多い（23・26・28）。

以上のようにS K14・S K12→S G20下層→S G20上層出土の軒平瓦は、顎Ⅰ→顎Ⅱ→顎Ⅲの変遷をたどることが、大筋において認められる。これを同一範の時間の経過から再確認してみよう。顎Ⅰの10の瓦（Ⅰ段階）は、範の下外区の線を太く彫り直したものになる（Ⅱ段階）と顎Ⅱに変化している。17の瓦は、範傷

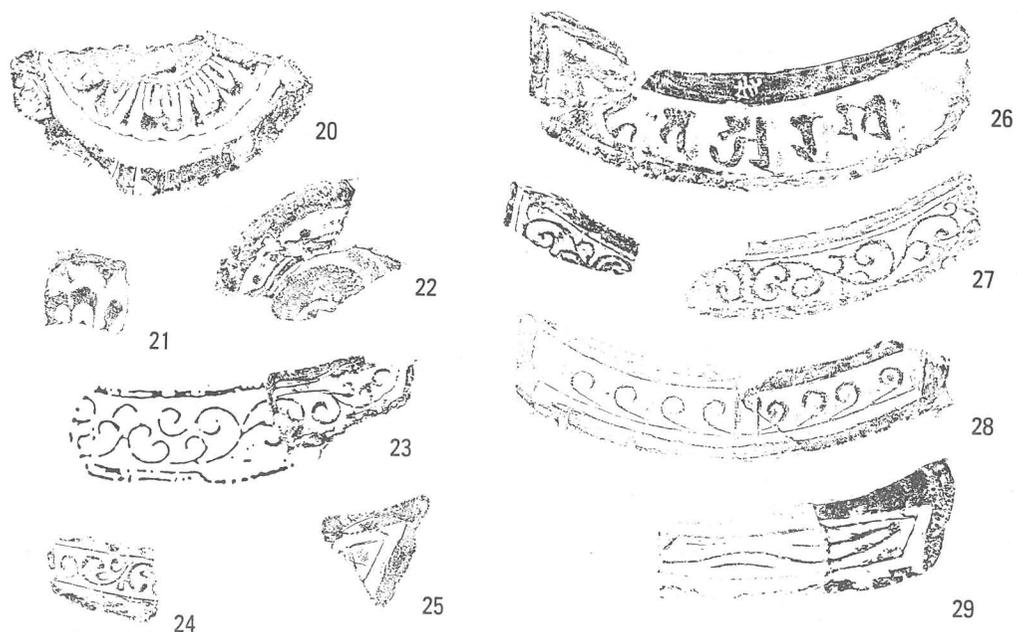


図71 SG20上層出土軒瓦(1/4)

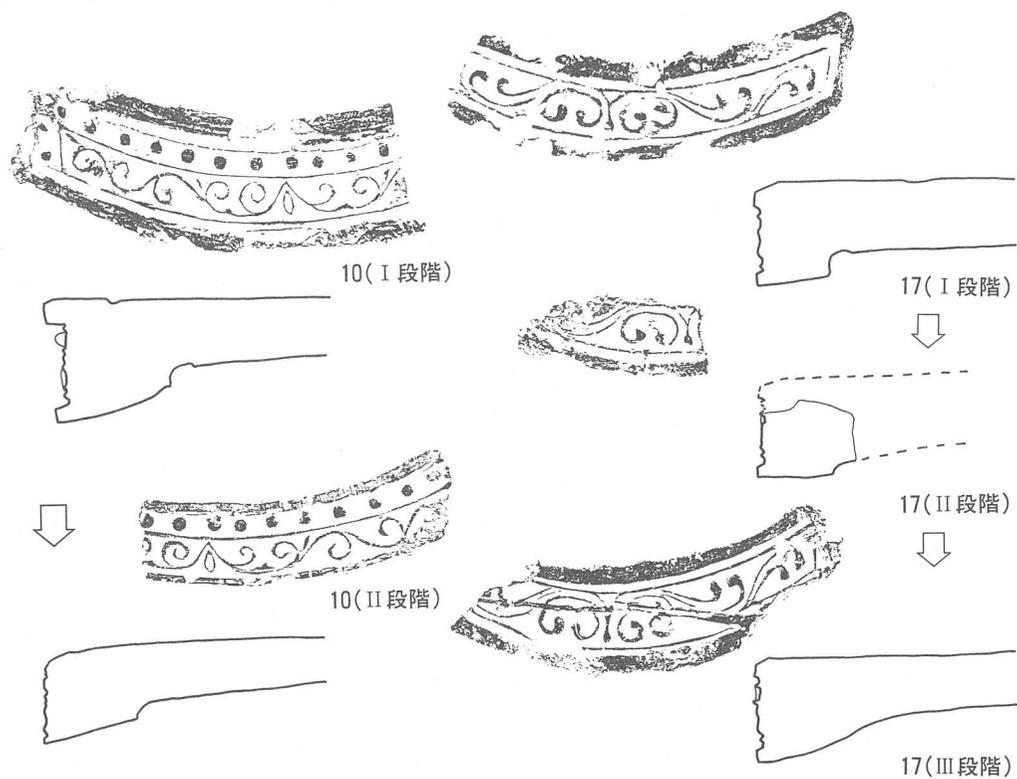


図72 同範例による顎の変遷

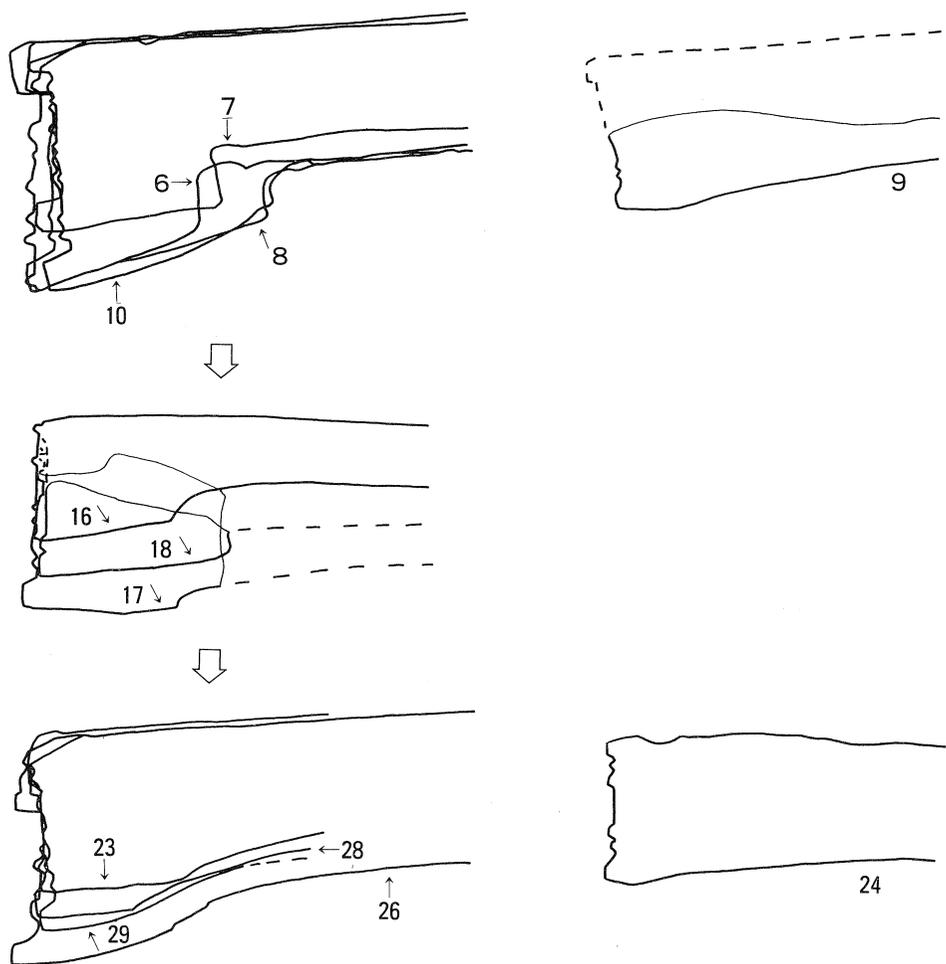


図73 層位による顎の変遷

の最も少ないものが興福寺食堂・五重塔で出土（Ⅰ段階）しており、顎Ⅰの形態を示す。本調査区SG20下層出土の17は、興福寺北円堂1975年出土例と同じく、唐草文右第3単位の左側に範傷が出現する段階と思われるが（Ⅱ段階）、顎Ⅱの形態に変化する。そして、瓦当面全体に範割れが生じたもの（Ⅲ段階）では、顎Ⅲとなっており、この瓦ではわずかの段差も持たず丸みをもった曲線顎となっている。

以上によって、基本的な流れとして、平安後期の軒平瓦が、深い段顎から浅い段顎へ、そして丸みをもった曲線顎へと変遷したことを確認した。これは1978年

に上原真人が「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14で述べた「平瓦部が厚手で段顎を有する製品」が古く、「薄手の平瓦部から瓦当に向けて緩やかに厚みを増す製品」が新しいとする説を、基本的には、層位的に立証したものであり、上記論文は、南都の瓦の分析においても高く評価できよう。そして、今回の出土例は、それをさらに細分させる可能性を示す資料として貴重である。ただ、これですべてが解釈できる訳ではない。以下に問題点を列記し、ひきつづき興福寺等の出土例を再検討したい。

まず、上原真人が指摘するように法金剛院境内出土の瓦が興福寺食堂と同範（法金剛院報告第56図-26・39・40・41）であることが注目され、さらに興福寺大湯屋と同範例（法金剛院報告56図-29・42）がある。興福寺大湯屋は天治元年（1124）6月焼失、8月に復興に着手し、再度の焼失は大治四年（1129）で、翌大治五年に再建を始めたことが知られる。一方、法金剛院の瓦葺建物である塔・経蔵は長承三年（1134）7月に立柱上棟が行われ、保延二年（1136）に供養されている。したがって、これらの同範瓦が12世紀前半の中葉頃に製作された可能性はきわめて高いようである。これらの軒平瓦は「薄手の平瓦部から瓦当に向けて緩やかに厚みを増す製品」である。

ところが、平瓦部が薄手の瓦は、興福寺で多量に出土するが、薬師寺・西大寺・法隆寺等ではきわめて少ない。したがって、各寺院の瓦屋ごとに製作技法が少しずつ異なる可能性は捨てきれないのである。

たとえば、平安後期の法隆寺の軒平瓦の中には折り曲げ手法による製品が存在するが、この手法によるものは薬師寺にはなく、興福寺でも法隆寺と同範かと思われる資料にその可能性を指摘できるだけである。

今回判明した薬師寺の軒平瓦における顎Ⅰ→顎Ⅱ→顎Ⅲの変遷は他寺院にも適用できるであろうか。興福寺においては、顎Ⅰの形態、つまり深い段顎の軒平瓦を永承再建時以降、治暦三年（1067）の中金堂・講堂再建までの11世紀中葉から11世紀後半の中頃までとし、平瓦部が薄い顎Ⅲに近い形態のものを12世紀段階におくことは可能である。しかし、いままでに発掘で出土した平安後期の興福寺の

軒平瓦で顎Ⅰ・顎Ⅱの形態のものが比較的少なく、平瓦部が薄い顎Ⅲに近い形態のものが多くをいかに解すべきであろうか。興福寺の堂宇は11世紀中葉から11世紀末まで焼失・再建を繰り返している。承暦二年（1078）の五重塔・西金堂再建や康和五年（1103）の中金堂・講堂再建の瓦をどれに比定したらよいのであろうか。発掘資料では顎Ⅰ・顎Ⅱは少ないが、今後の発掘で増加するのであろうか。それとも、平瓦部が薄い顎Ⅲに近い形態のものが、興福寺では11世紀末又は後半頃まで遡るのであろうか。今後検討を要する課題である。

次に薬師寺から出土した顎Ⅰ・顎Ⅱの形態をもつ軒平瓦で他寺との同範例を求めると、6・10・16などは顎Ⅰ・顎Ⅱの形態を示しているが、7と同範の西大寺例や薬師寺報告258と同範の西大寺例では顎Ⅲの形態である。また顎Ⅲをもつ23と同範と思われる興福寺例は直線顎であるし、28のように両端を切り縮めたものがわずかに段差を残し、それより古いと考えられる両端を切り縮めていないものがゆるやかな丸みをもち段差がないという資料もある。今後、ほとんどすべての瓦が範傷進行の経過により、顎Ⅰ→顎Ⅱ→顎Ⅲと変化すると言い切ることはできず、むしろその中に顎形態のバラエティを考えた方がよいだろう。このバラエティのあり方は、一つの瓦屋内での工人差の場合と、範型が移動して他寺の瓦屋での技法的な差が生じる場合とがありうる。

次に直線顎の軒平瓦9であるが、これはS K14出土であるが、顎Ⅰの段階よりやや新しくなる可能性もある。これと同範の薬師寺での軒平瓦は顎Ⅱ又は顎Ⅲのものが多く。また、S G20上層からも直線顎の24が出土している。直線顎の形態をもつものが、顎Ⅰ・Ⅱ・Ⅲとどのようなかかわりをもつか、これも検討を要する。以上のように、薬師寺では大勢として顎Ⅰ→顎Ⅱ→顎Ⅲの変遷を示しているが、基本的には製作技法は変化していないようである。顎Ⅰは顎はりつけの手法が明瞭であり、いずれも平瓦部は厚手であり、凹凸のある板状にひろげた粘土を二枚程度合わせる。顎Ⅱでは、顎部を含んで粘土を貼りつけることに変わりはなく、顎Ⅲでも顎部に粘土を薄く貼りつけている。平安前・中期の瓦と顎Ⅰとの関係、顎Ⅲの瓦と鎌倉の瓦との関係も今後の検討課題である。 （山崎信二）

C. 木製品・石製品・土製品等

木製品は、S G 20整地土から下駄1点と部材1点、S K 12から棒状品1点などが出土した。また、S K 12・14からはモモの種子などが出土した。下駄は小判形の平面形を呈する小型の連歯下駄で、半截する。板目材の木表を台の上面とし、前壺は中央に、後壺は歯の内側に穿孔されている。全長17.3cm。石製品はS K 12から大型砥石が1点出土。土製品は、S K 12・17・23から窯壁片、S G 20から建物の壁土のほか、鑄造ないし鍛冶に関連する炉壁片や鞆羽口あるいは窯壁が出土。そのほかに鋳滓も出土している。冶金関連の遺物は池内堆積土層中にのみ含まれる。鞆羽口には基部片があり、残存する長さ11cm、ラップ状に開く基部の直径が9.5cm（内型6.4cm）、先端の直径7~8cm（内径2.7cm）である。鞆羽口としては一般的な形態である。（小池伸彦）

4 まとめ

薬師寺北門を入れてすぐ東の一郭は、11世紀代には狭い範囲に炭土壌が処々あった。この土壌は、近くに恒常的に火を焚く施設があったことを示す。鞆羽口や鋳滓は出土しておらず、鍛冶関係ではない。土師窯の可能性もなくはないが、焼け歪んだ土器は瓦器椀（完形）が1点出土したのみで、決定できない。いずれにしても生産に関わる区域ないしは厨房的な区域であったと推定される。

池の造成は11世紀末ないしは12世紀初頭頃である。処々に石を置き、出島があるなど、単なる溜池ではなく観賞用の池であったと推測できる。おそらく、池の北に建物を設けた子院の形成があったのであろう。薬師寺の子院としては、たとえば、東北院が元永元年（1118）、喜多院が承安5年（1175）に登場するが、今回発掘した子院名はわからない。この子院は、池の焼土層からみて、12世紀末頃に火災にあったようで、池自体もこの時期には機能を停止してしまう。（毛利光俊彦）

注

- 1) 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館 研究論集』4 1978
- 2) 川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』1983
- 3) 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』1983
- 4) 森田勉「東幡系中世須恵器生産の成立と展開」『神戸市立博物館研究紀要』3 1986

21 薬師寺西面大垣の調査 第223-17次

店舗建設に伴う事前調査である。当該地の周辺における従来の調査は南で3カ所（第118-27,123-18,131-3次調査）行われて薬師寺の西面大垣が確認され、また

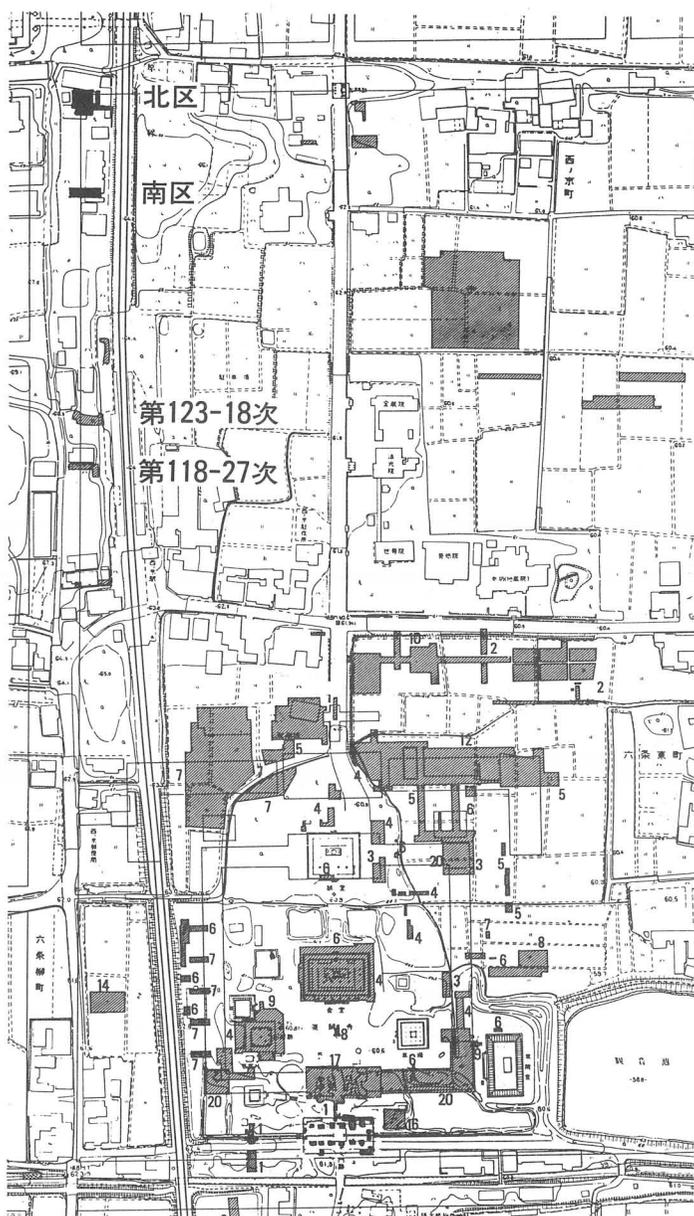


図74 薬師寺周辺調査位置図

東方には旧境内の北門が位置する。当該地はちょうど西面大垣と北門から西へ延びるであろう北面大垣との交点が予想される場所である。現状では対象地の東南部に比高約1.5m程の土壇状の高まりが残っており、西と北が一段低くなっている。この高まりが西面大垣を踏襲している可能性が考えられたために、東西方向のトレンチ（南区）を入れ、大垣のコーナー想定地にもう1カ所の発掘区（北区）を設定した。発掘面積は合計約270㎡、調査期間は11月20～12月5日である。

南区は東端から中央にかけては、土壇状高まりの直下約15cmで明黄色

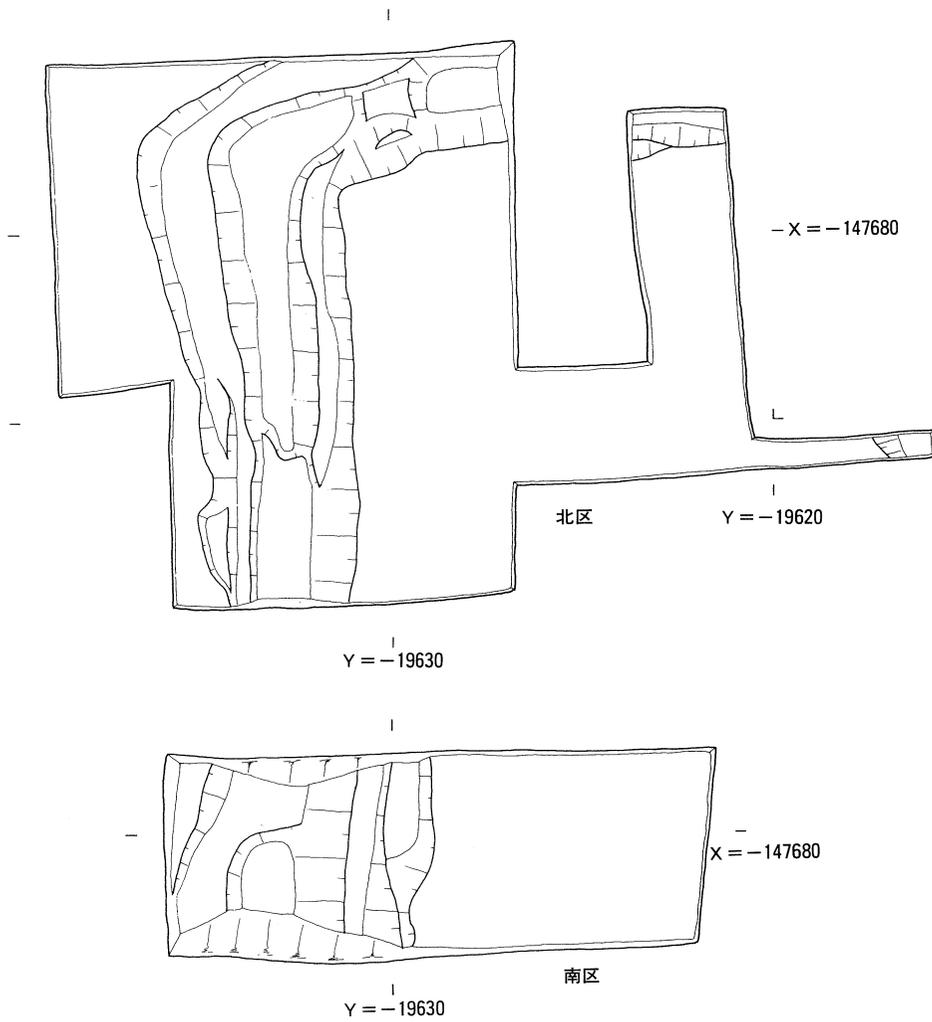


图75 第223-17次調査北区(上)・南区(下)遺構図(1/200)

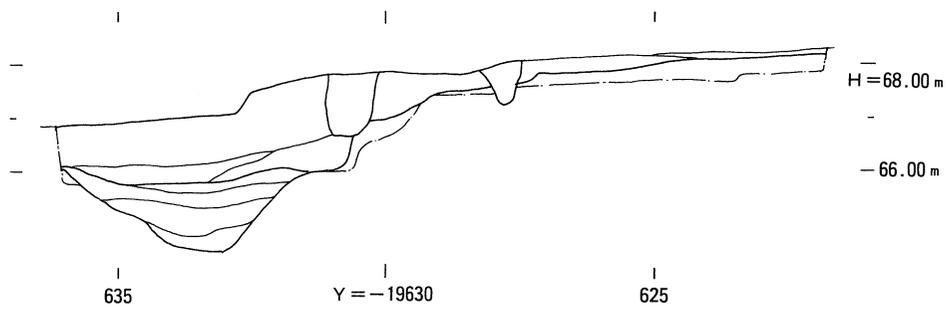


图76 南区北壁土層図(1/100)

砂質土の地山があらわれ、遺構面は地表の高まりに沿うように発掘区中央付近から西へ大きく下がってゆく。西端部は平坦面で、近世・近代の遺物を含む層が75cmほどあり、その下で南北溝1条（SD01）を検出した。溝幅4m、深さは部分的に凹凸があるが、深い所で1.5mを測る。溝の堆積は2層に大別できるが、遺物は染付椀等いずれも16～17世紀の遺物が中心となる。

北区は土壇状の高まりはなく平坦面で、表土下、耕土・床土を経て約30cmで黄灰砂質土の地山にいたる。顕著な遺構は溝1条のみである。この溝は南区で検出したSD01の延長上にあり、一連のものである。北区の北端で東に折れてSD02となる。溝の規模及び出土遺物も南区と同様である。

今回の南区より約100m南の第123-18次調査、同じく約120m南の第118-27次調査等によると、いずれも地山削り出しの西面築地を約5m幅で確認し、第118-27次調査ではその上に約50cmの版築も残っていた。それらは奈良時代のもので、その上に中世の土塁の積土がのっていた。土塁の東側には内濠がなく、西側にのみ外濠状の溝があった。

これに対して、今回の調査では地山を削り出した痕跡は確認できない。つまり、位置的にはSD01の東の地山部分が大垣推定線であり、その幅を5m程と考えると、発掘区内で大垣東端の段が検出されるはずであるが、現状では確認できず、地山は平坦なまま東へ広がってゆく。版築も全くない。しかし、SD01は従来確認している南北溝の延長線上にあり、それが北区で東に折れることは、この内側に大垣の西北隅を想定して理解すべきであろう。したがって、ここでの西面大垣は築土が全て削平され、基底幅も確認しえないが、外濠の存在によって位置を推定しようと判断した。ただし、外濠の遺物から見て、その時代は中世末～近世初頭であり、それが奈良時代当初の大垣西の溝（西二坊大路東側溝）の位置を踏襲している可能性が高いと思うが、それも痕跡としては残っていない。（寺崎保広）